

東方深理壞～The Girl To Deny Life～

h i n a n a n

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めましての方には初めまして、お久しぶりの方には始めまして、と精一杯の感謝と親愛を投げつけさせていただきます。

どうも東方トークで活動中のヒナでございます。

※この小説は東方トークで私が連載している『東方否想理ノName Girl's Say』を所々改変して書いてあるものです。

？

そこは幻想郷。

忘れられ幻想と成ってしまったモノと、『己』を失くした者が集う場所。

そこに一柱の神様と独りの『人間』が入り込み、管理者たる巫女へと挑戦状を叩きつけた。

目的も、思惑も、想いも、現象も、なにもかもバラバラに入り乱れた異変。

はたして彼女の失くした『己』とはどんなものなのか……。

彼女はそれを見つけ出すことが出来るのか。

此度、巫女を苦しめる災厄へのカウントが始まる。

だが、同時にこれはミユが巫女と出会い、心を通わす物語でもある。けして、絶望などさせてやらない。

？

すいません

あらすじ書くの苦手なのです……………(泣)

目次

序	1
第一章 否する少女と始まりの幻宴	
とある巫女（ミコ）の幻想入り（ハードモード）	4
神とお払い棒は使いよう	9
ミコと質問と幻想郷	16
巫女さんに異変解決を求めるのは間違っているだろうか	26
天浮女と星瞬女（てんぷおんなとせいしゅんおんな）	41
巫女は（人間の）友達が少ない	59
かぜはふりのおしごと!!	72
この素晴らしき（性格の）ミコにぶちギレを!	93

序

風が吹きわたり、水は澄みわたる。

森がざわめき、地は命を芽吹かせる。

人は皆助け合って生き、そして……

妖怪が自分を曲げず、堂々と存在する。

ここは幻想郷。

私たちの住む人の世より忘れられたものが行き着く場所。

よきも悪いも、いい意味でも悪い意味でも、妄執も忘我も全てを受け入れるそれはそれは残酷な世界。

いや、人の世から弾かれたものが隔離される場所といった方が正しいのか。

あるいは紅き夜を支配する強大なる女王。

あるいは人のみならず妖からも信仰を得てしまった外法の僧。

あるいは追っ手を全て虐殺してのけた月の姫とその従者。

あるいはただ在るだけで強者たる美しい花の妖。

あるいは、何を言わずとも名を出すだけで恐れられた絶大なる力か。

いずれにせよそこに集うは上も下も一筋縄ではいかぬものたちだ。

当然だろう、『早く忘却したい』そう思われたモノ達が闊歩する小さな世界で、それでも死なずに生きているモノ達なのだ。仮令、下等な妖怪一匹であつてもこの世界にいない者が簡単に相手取れないはず。出来るのであれば、それはこの世界と同じ——すなわち『化け物』だ。その世界に住む巫女の一人はこの状況を憂えた。人にして、その小さき世の管理者である『化け物』の一人は憂えた。強大なるモノたちの牙を多少削ぐための世界であるのに……『外』に出て否定されて消え去ってしまったための世界であるのに、その効力が徐々に弱まりつつあることに。考えた巫女はある一つのルールであり、法を定めた。

それは『弾幕ごっこ』というただの強者にとっては実にふぬけた

ルール。そして遊びあきた圧倒的な強者と、虐げられてきた弱者にとって楽しくそして都合の良いルール。

ただの強者たちは怒り狂ったがそれだけであった。この世界を治める二人の管理者に己の自慢の牙を、爪を振るうことが出来ないから。圧倒的な強者である二人の化け物に敵わないから。

圧倒的な強者はただ笑った、牙を剥き凄惨に。退屈であった日々にて自分達が対等に多数なものたちと争える事実。

弱者は、穏やかに微笑む。望んでいた安寧の日々が手に入れられることに。強者と驕っている者へと反撃の弓矢を打ち込める機会に。

かくして法は定まった。

知らぬはこれよりこの地に立ち入れるものだけである。

しかして世はたいして変わらなかつた。

確かに強者と弱者の関係性は変わり、圧倒的強者もまたその座に常に座れなくなつた。

しかし、巫女が憂えた状況は大して変わらなかつたのである。確かにただの強者たちは実質的な力を蓄えなくなつた。だが、そのかわりに知恵を蓄えるようになったのだ。弱者の特権であつたはずのそれを。

だが、巫女はその状況に何も憂えなかつた。元より、知恵だけでどうにかなるのであればこの化け物は化け物と呼ばれていない。それに巫女が憂えたのは弱者にとっての位置ではなく、自分に届きうる力の排除だ。巫女の目的は達成された。

さて、ここで一つの質問だ。

この世界に自ら入るとなれば、この世界の情報がある程度……パワーバランスぐらいは把握していなければならぬ。到着して即退場など誰でもごめん被りたいのだから。

ではその上で。

正常な思考回路を持つものでこの世界に入りたがるものなどいるのだろうか。強者が実質的ではないにせよ着々と力を増していき、弱者ですら油断できない相手で、それらすべてを上回る圧倒的な怪物

がいる……そんな悪夢のような世界へと。

答えは、否。

そのような人物がいるとするならばそれは死にたがりか狂人だけ。だから正常なものなら、いない……の筈だった。

管理者の一人——巫女がかつて憂えた状況は改善した。

だが、巫女はひとつ思い違いをしていた。

巫女の策は確かに功を奏したが、その状況を完璧に抑えられるものではない。

勿論、その危険も承知はしていたはず。

だがそれでも、どこかで手遅れになる前に対処できると踏んでいたのだろう。

それは危険な思い違いだった。全く知らない新たな要因が加わればそんな策など簡単に壊れてしまうというのに。

巫女の慢心は最悪を引き起こす。

誰よりも巫女自身へと牙を剥き。

『それ』はもうすぐそこに。

第一章 否する少女と始まりの幻宴

とある巫女（ミコ）の幻想入り（ハードモード）

?????

わたしが望んだものは手に入れたくなかった。

あの人が見たものは手に入れられなかった。

.....

??????

その日、幻想郷の列強者達は悟る。

新たな争乱の幕開けを。

.....

それは、まるで幕開けのゴングのようでもあった。

『[?]幻想郷中に響いた重い、爆発のような音と押し潰されるかのごとき[?]』

ひとたび動けばこの場所はひとたまりもないだろう、と想像させるほどのそれは大半の者にとって幸いなことに直ぐに消えた。だが、一部のものは違う。それほどの物を隠せるその地力に目をむく。

だが、それでも殆どの者は驚いただけで興味を外した。何故ならこの土地にそのような実力をもって入ることが、幻想郷を滅ぼせる力を持つて入って来ると言うことがどれ程危険なことか理解出来ないような愚か者に興味が無いから、というのがひとつ。そして、そのような事をすれば管理者の一人——この土地を愛する妖怪の賢者が直ぐに排するから、興味を向けても仕方がない、というのがひとつだ。

だが事態は着々と彼らの予想を外していく。

首謀者と神社のみこを除いて。



「……文」

「……ええ、分かっておりますとも」

薄く目を開け、呼び掛けると彼女もまた厳しい顔をして答える

「行くわ」

手短かに伝え、必要なものを手に取り、空を見上げる。

すると彼女は、私の肩を掴み心配そうな声でこう言った。

「ブロッコリーとカリフラワー、間違えないでくださいね？」

「誰が夕食の買い出しに行くって言ったのよ！」

あとどこぞのお子ちゃまトラップマスターじゃないんだし、間違えるわけじゃないでしょう。

いやそうじゃなくて

「危険分子の排除に行くのよ！」

間違える要素なかったでしょ、今！」

「いやあ、なにも言わないで一言だけでしたのでつきり……」

「通常時ならねえ!!」

え、じゃあさつきはどういう意味で、分かっています、なんて言ったの?」

「今日の夕食は八ツ目鰻の蒲焼きなんですって」

「ブロッコリーは?!?じゃなくて、なんでそんなことあんたに言わなきゃいけないのよ!!」

あれよね、誰かよくわからないやつよりも目の前のこいつを先に退場させた方がいいのは気のせいじゃ無いわよね? 私の心の平穩的に。そんな私の心知ってか知らずか、彼女は不思議そうに首をかしげていた。

「さて、霊夢さんをイジるのもこれぐらいにしておきましょうか。後々怖いですし。」

ピキッ。

何かが限界を越えた音が聞こえた気がした。

なーんの音だったかしらあ？

……ふふふふふふ。

あ、思い出しちゃった。

「あのく、霊夢さーん……？」

「よし分かったわ。そうね、私も腕前が錆びてるかも知れないし、勘を取り戻す為にその辺の妖怪でちよつと慣れておきましょうか。

ええ、早急に。」

「え、霊夢さんちよつとなんでいきなりそんな超弩級の陰陽玉を出し分かりました分かりましたので話し合いをしましょうそう争いは何も生みませんどうせ生むなら魔理沙さんとの既成事実という超弩級のネターボババアツ!？」

理性の限界の音ね、これ♪

制裁中なので画面を差し替えます。

しばらくお待ちください。

く少女仕置中く

……ちえ、結局逃げられたわね。

まったく……速さだけは、追いかけたときの頭文字Gと同じぐらい

速いんだから。

さて、それじゃ私もそろそろ出るとしましょうか。

あんまり遅いと紫にうるさい小言聞かされちゃうし……というか、さっきの文といい紫といい私のことを子供扱いし過ぎなのよ。なんか、弾幕ごつこのルールを決めてから、ますます強まった感じがするし。確かに奴等から見たら子供としか言えないけど、もう少し何とかならないものかしらね……。

取り敢えず今度他の人間とお茶をするときに盛大に愚痴ってやろう、と予定を決めつつ、さっきよりももう少しちゃんとした装備をしていく。

逃がしたのは、精神的には非常に良くない。しかし、異変全体で見ればあの幻想郷で最速と噂される鴉天狗に任せるのが最適である。普段はけして本気を出そうとしないが、本当は鬼に迫るほどの実力者だ。彼女なら何とかしてくれるはず。

彼女の情報の有無でその異変の難易度が変わる、とすら私は思っている。

とは言え、のんびり出勤なんてしてたら里の人間が不安がるでしょうし、なにより紫に説教喰らうのが面倒くさい。まあ、ひとあてしたらいつも戻ってくるでしょうし、その時に色々聞きますか。

それにあれだけの規模の力ならもう紫が……ってあれ？

いつもならこれぐらいのタイミングで出てくるってのに珍しいわね。

私に構っている暇がないほど面倒なヤツなのかしら？でもそれにしても、アイツの力とか特に感じないのよね。

アイツとは管理者同士、この土地の象徴であるもの同士で互いの力を感じ取れるようにしてあるはずなんだけど……。それにアイツぐらいの妖力なら私を感じとれないわけないし。

幻想郷から出て……ても何かあったら直ぐに戻ってくるはずね。

やれやれ、ホントに今日はどういった風の吹き回しかしら。

「……………」

ホントは分かっている、これが樂觀できない状況だつて。アイツほ
ど『ここ』を愛してるヤツはいないし、それにさつきから私の勘が警
鐘を鳴らしっぱなし。

だけど、焦ることはしない。本当に思った通りで、危ない状況であ
ると言うなら尚更だ。万が一にでも失敗するわけにはいかない。こ
の土地を護る巫女として……博麗を継ぐものとして。

それにアイツは生半可なことじゃどうにもなるはずがない。

そう思いつつ、私は急ぐ気持ちに封をして、さつきよりも更に嚴重
に装備を整えていく。

護るという責務の重みを刻み付け、アイツに追い付くために。

ふと空を見上げた。

さつきまで清々しく青かった空は、今はその灰色を私の瞳に映して
いた。

神とお払い棒は使いよう

かじかんだ指に風が吹いていくのを感じ、予想外れの世界に不安と期待を寄せる……つてところですかねえ？

覚えていた歌詞をそらんじながら玄関の戸を開きます。

カラカラ、という軽い音と共に見えてくるのは見事な自然。あつちを向いても木、こつちを向いても樹木。おまけに能天気そうな鳥の声まで聞こえてきます。勿論都会っ子な私は、こんな田舎の光景なんて修学旅行ぐらいでしか見たことは……あ、そう言えば行ってなかったんですした、旅行。お仕事で妖怪退治に行ったときぐらいですかねえ……？

ともかく、どうやら転移自体は成功したようで。あれだけのエネルギーを使って家の近所とかでしたら、ホントに泣いてましたよ。

ホツと一息つきますが、もうひとつ問題が。ここが目的地なのかどうか確認するすべがないんですよ。

まあ、ここの管理者さんのお陰でここまで堂々と入れたのです。本当に着いているなら直ぐに誰か来ますよね。それまで、少しぐらいこの自然を堪能させてもらいましょうか。

と言うか本当にどこを見ても木しか無いですねえ……。

数分そこらを回って思った感想です。折角の非日常なのにこんなことしか出てこないなんて悲しくなっちゃいますよ。いや、確かに景観の良さ、そして環境の良さは認めましょう。木漏れ日が差し込んでいて、何もなければお昼寝したいぐらいにはよい場所、気候なのです。でも……森か林っぽいので仕方ないのですが、木があると言うか、木しかないというか。

……さなちゃんもこんな感じで『ここ』に来たのでしょうかね。そう考えると少し感慨深くも有りますか。

む、というかさなちゃんです思い出しましたよ。そう言えば、神社隠しておかないといけないのでした。まだここを他の人に見せるわけにはいきませんし、あの人、人のミスにはうるさいです。自分は存

在自体がミスってるような配置されてるくせに……。

ま、流石にまだ誰か来るとは思いませんが、早めに隠しておく事に越したk

「特ダネですっ!!」

「ひゃ、『遮断』っ!!」

「おs、バゴムツ!、ふぎやつつ」

どさっ。

……。

……………。

え、いやなにその……………え?

安心してくださりやがれませ、混乱してるのは私でした?

ええっと、と、取り敢えず状況を整理してみましょう。私としてもいきなりすぎてなにがなんだか……………。

森のなかで静かに思考にふける美少女

← ←

唐突に降ってくる声と何か

← ←

咄嗟に防御術式を唱える

← ←

何か落ちてる↑今ここ

……はい、整理しても全然ですね。美少女のところでは首を捻った方には、私のことだと説明しておきましょう。まあ、自分自身でそう評するのは嫌なのですが、性格自体は完璧な美人なのであながち間違いでも無いのですよ。

相変わず混乱した頭で目の前を見ると、ソコには先程の声の主と

思われる女性が……——ええっと、こう表現するには少し抵抗を感じるのですが——落ちていました。ええ本当に、同じ女性として使うのは忍びない表現ではありませんが、ベシヤって感じで落ちていたのです。そう、目をぐるぐるさせ、背中につけた何かを力なく動かしながら……って。

この人羽がはえてませんか？ 何か真っ黒いのがパタパタしているのですが。ちょうど鴉みたいなのが背中から。

真っ黒い羽……ここが海外でしたら堕天使、もしくは悪魔が化けた天使辺りと判断して起き上がる前にフルボッコにするのですが、ここは日本。加えて、この人？の衣装が山伏の着るような装束。まず人間、と言うより通常の生き物では有りません。恐らく妖怪かそこら……。

ええ、思い当たる妖怪は一つ有ります。でも、私が伝承のなかで見たそれは、名前の通り、鴉の頭とかついていたのですけどね……。あれでしょう、往年は可愛い、という要素も取り入れないと生きていけないのでしょね、妖怪であるのに哀れなことです。

そう、妖怪と言うか、私の思い当たる妖怪——鴉天狗と認めたくない理由がそれなのです。つまり、可愛すぎるのです。

ショートカットでボーイッシュに纏められた黒髪。まさに鴉の濡れ羽色と言うのが正しいような綺麗な髪です。それでいて眠りにつくその顔は少女のあどけなさを宿していて、髪型との見事なギャップを産み出しています。肢体は、スラッとしていて健康美を感じさせるものでしたが、スレンダーと思わせつつ引つ込む所は引つ込み、「大きければいい」なんて言う下らない幻想をうち壊すほどに完璧なバランスを持っていました。大きくもなくまた、薄くもなく……ええ、同じ女性として嫉妬ちやって少しその恩恵にあやかろうとしても許されるぐらいには。

あ、もう一個認めたくない理由がありました。

見えない壁にぶつかって気絶するって……。

私の知る鴉天狗はもっと頭が良さそうなイメージだったのですが……。

おっと、こんなのを見てる暇は無いのです。

早く『これ』を隠さなきゃ、この人みたいなのが何人も出てきてはたまったものではありません。それこそ、あの人に怒られてしまいます。怒るだけなら良いですけども、捨てられなんてした時には……………。

とにかくこれ以上失敗はできません。ここからは完璧にこなさなければ。

~~~~少女作業中~~~~

「ふい〜…………」

つい、口から溜めていた息が出ます。

細かい作業だったのと、それで最後だったのが合わさって安心してしまいました。全く、科学の力もなく光学迷彩《メタ・オプチカルカモ》と同じことをしろ、なんて面倒なことを申し付けてくれやがります…………今日の夕飯は激辛のフルコースですね。わたしはその目の前でカボチャの煮付けでも頂きましたよう。

本当に…………まだ透明マントを出された方が楽でしたのに。

ま、これで行われていた作業も終わりましたし、取り敢えず情報収集に行きましょうか。と言っても、先ずはこの森からるのが先ですかねえ。飛んでいけたら楽なのですが…………鶴仙人なんて現代にはそういけませんし、舞空なんてできっこありません。普通なら歩くのにちようどいい天気なんですけども。

吸い込まれそうなほど蒼くすみわたった空を見上げていると、悩みとかも纏めて吸いとってくれそうな気がしました。

「うう、ん…………」

あ、そう言えばこの方がいたのです。



作業が終わった解放感からすっかり忘れていましたよ。

うーん、ほつといても死んだりはいしない気がしますけど……でも流石にこの状況でほつとくのも人として、ねえ？とはいえ、だからと言つて構うのもめんどろなんでしょうね。でもこの人が目を覚ますまでここで待ってい ると言うのも気が長い話ですし。

「……はあ、仕方ありませんか」

諸々考えると、やっぱりこの状況を維持することが一番面倒なんですよね。そのなかでも面倒な派生は、彼女がこの状態で誰かに見つかることです。そうなつてしまつては、仲間とかが居るのなら、団体さんがご来訪される予定を自分から作り上げることになりますもの。さて。

「もしもーし」 トントントン

「ん……う……」

ダメみたいですわねえ。もう一回、今度は強めに試してみますか。

「起きてくださいいよ〜」 ユツサユツサ

「んん……?」

あ、あと一押しな感じですね！ よーし、耳元に寄つて……

「貴女が持っているものを全部燃やしますよ、あいうえお順と作者順、どちらがいいですか？」

あ、いつそランダムに抜き取つて燃やしましょうか。」

「私の原稿がっ!!」 ガバアツ!!

こうかは ばつぐん だ!! ▼

私が魔法のワードを呟くと彼女は急いで起きてくれました。いやあ、流石うちの駄神を起こすときにも効力発揮するだけあつて物凄い効果ですねっ。ちなみにうちで使う時は『もの』を『マンガ』に変えております。皆さま方もくれぐれもこれを使われる側にならないように気を付けましょうね♪

なんてふざけたことを考えているうちに彼女も復帰したようです。ただ、流石に状況が把握しきれないのか仕切りに頭を振っています。

「え、あれ……?」

何が起きたの………?」

「おはようございませす」

「うわはあ!」

影に隠れるような位置からいきなり挨拶をしてみると実にいい反応、まるで芸人さんのそののようなりアクションが返ってきました。実に楽しいお方ですね。ですが、あまりかまってもいられません。いくら隠したとはいえ、鴉天狗相手ではいつばれるかわかったものじゃ有りませんし。

「やつと起きたのですね。」

随分と遅いです、私がどれだけ待っていたと思うのですか?」

「何で私は寝起きで見たことも無い子から責められているのでしょうか?」

えっと、取り敢えずごめんなさい?」

「はて、謝られても……私は貴女から特に被害受けていませんし」

「じゃあ最初の文言は何だったのかと聞きたいのですが」

まったく、よくわからない鴉天狗さんですねえ。意味の無い謝罪は人をイライラさせるだけですよ?そんなことも知らないのですか。

「人をイライラさせる選手権があれば貴女よりも、すごい人はいないと思いますよ?」

ではなくて。

ええっと、まずはお礼ですね。せっかく助けていただいたのにお礼も出来ないようじゃ、鴉天狗の名を汚してしまいます」

「いえ、お気になさらず。名前なんてどうでもいいので」

「ここまで素直にお礼を言いたくなくなる物言いも珍しいと思います。」

というか、それでは此方としても悪いです。」

む、やけに食らいついてきますね。私は早く場所をうつしたいのですが……。

「仕方ないですね、聞いてあげますから手短かお願いします。」

移動しながら話しますか?」

「……いえ、この場で結構です」

あれ？ 今の間は一体……？

私の疑問はさておかれ、小鳥が空を横切り話は続きます。

それにしてもさっきの間に、一瞬凄いい顔しましたけど大丈夫でしょうか。

「では」

彼女はコホン、と仕切り直すように咳払いをすると薄っぺらい笑みをその口許に貼り付け、こう言葉を紡ぎます。

「改めまして、お礼を申し上げます。

私の種族が分かっているだろうにも関わらず。

先程の状態を良しとせずに。

かつ、私への情報提供のために。

助けてくださって、本当にありがとうございます。

ええ、例え『そこ』に『何か』しらの理由が『あつて』もそれで感謝しなくなるなんてことはございませんよ。

ああ、それと。

私たちは親切な方の情報には、口が固くなりますのでご安心を♪」

そういつて締め括ると頭を一度下げ、先程と同じ笑みを浮かべこちらに向き直ります。

その笑みは、まるで猛獣が牙を構えるときにも似ていました。

空にはいつの間にか暗雲が立ち込め、私の頬には一足早く雨粒がポツリと落ちていくのでした。

## ミコと質問と幻想郷

目の前には先ほどの鴉天狗さんがいらっしやいます。彼女は、こちらの心を覗きこむように瞳を合わせ、

「これから行いますは、簡単な質問の応酬ですよ」と口火を切りました。

そのまま続けて言葉を重ねられます。

「無回答、意味の無い回答はこちらで勝手に解釈いたします。あなたがこの幻想郷で生きにくい事になっても私は関知しません、とだけ言っておきましょう。

ただし、答えたくない、答えられない、という回答はありとします」「宜しいのですか？極論、私が会話中ずつとそうしているかもしれないよ」

「ふふっ、天狗相手にそれを選ぶほど、貴女も頭の回転が遅いわけじゃあ、ないでしょうに。

いえ、だからこそ条件の変更で私の方も縛ろうとしたんですかね？」

「……まあ、そんなところで」

はいそんなわけで、正直、鴉天狗さんの言葉の真偽が分からないため、動きづらいのが実情です。

どうも、皆さま方。ただいま、狡猾にて老練な鴉天狗さんにいいようにもてあそばれそうな私ですよ。とは言え、普通に勝負するのでなく、ここから始まるのは質疑応答を互いに行う情報の収集合戦ですが。というか、普通に戦うならあつという間もなくやられてしましますよ。天狗 is 怖いですよ。

さて、現実逃避で、見えない観客に愛想を振りまくのもこれぐらいにしておきまして、現実の認識を始めましょうか。

あの不気味な笑顔のあと、固まった私に少し申し訳なく思ったのか、急におどけた調子で話始めた鴉天狗さん。

彼女が言うには、言葉だけでなく他のお礼もしたい、とのこと。折角なので、この土地の情報について聞くことにしたのですが……。

説明口調疲れましたね、帰ってよいでしょうか。え、ダメなのか？仕方ないですねえ、あと少しだけですよ。

まあ、それならついについてことで、あちらからの質問にも答えることにしたのです。もうこの時点でお礼の意味がないです。完全に此方の動きを読んでいたね。

はい、そう言うわけで現実逃避終わりです。

現実逃避はさつき終わったのでは無いのか、と聞きますか？

でも、現実の認識も現実逃避の一種でしょう。一旦、第三者視点で見ると見えますから。見ているものこそ現実ですが、見るための立ち位置的なものは完全に部外者のそれなのですよね。

さて、では今度こそ現実へ戻りましょうか。

「質問は私からでいいですよね？」

「はい、お先にどうぞ。私は貴女の奇行を見て自分の行動を直しますのぞ」

「ここまで心に刺さる慣用句のアレンジと、使い方を聞いたこと無いんですけれど」

「えへへえ、照れちやいますねー」

「誰も誉めて、無いです。」

「というか、真顔でやるの止めていただけませんか？」

「そんなに真顔が不思議なのですか」

「不気味ではありませんね」

何て失礼な。

なんて、ふざけるのもこの辺りが限界ですね。こちらもそろそろ覚悟が出来てきましたし。

ここからの方針として最善は、あちらからの質問を上手いことかわしつつ、あちらがつい答えてしまうように誘導する。言葉に出すだけなら簡単ですが、いざ実行に移すととなると……それも私よりも頭の回転が早い人になると、成功率を見ない方がうまくいくのは、つてぐらいの難問ですよ。ちなみにうまくいくのは後処理とメンタル面のみです。

「……はあ。じゃあ、始めますよ?」

「ええ、こつちはいつでもいいのに、なぜ早くしないのですか?」

「……………」

「どうかいたしましたか」

「いいえ、なんでも」

はて、なんだったのでしようか今の間は。

「こ、今度こそいきますよ」

「ええ、なので先程からいつでもいいといっているでは有りませんか」

「はい、もう貴女がそういう人格で話し方だつて言うのは分かりましたので大丈夫です。大丈夫ったら大丈夫ですよ……!」

「大丈夫そうに見えないのですが。診療所へいきますか?」

大丈夫、大丈夫と呟き続ける鴉天狗さんに向かって声をかけます。彼女、端から見れば相当危ない人ですよ。全く誰がこのような美女をこんなにも無惨なふうにしてしまったのでしょうか。

私がこの世の無情に心を痛めていると、鴉が同情するように私の上を飛び回り、くあくあと呼び掛けるのでした。

……というか、普通に鳴き声がうるさいですね。こちらは真面目に話しているのですよ、はたき落としてあげましょうか。

あ、どうやら立ち直ったみたいですね。

「……大丈夫、ええ、ホントに大丈夫ですつてば。」

よし……早くしないと私の忍耐がヤバそうなのでもう質問しますよ、します。

それではえーと、まず……ずばり貴女方の目的は?」

未だ若干目が危険ですが、質問したいはなかなか思い切ったところを突いてきますね。うまく答えないと全部予想されちゃい……ん、いやここは正直に答える必要ありませんね。

「黙秘で」

答えると色々予想されてしまうのは、多少のリスクがあっても答えないのが無難です。ふふふ、とっさの判断にしてはまあまあ良いのでは?」

……つと、あれ?鴉天狗さんが何だかブツブツと……

「取り敢えず『方』で反応しないと言うことは複数人は確定、それと知られてしまつては意味がない異変……というより強行に実施するパワー、又は人数が足りないと言うことで……」

……ほえ？

ん、どういう事でしょう。

だつて、あり得ません。あり得ないはずなのです。いくら私個人での判断とはいえ、情報を流さないように黙秘したというのに、違う部分からだだ漏れしてしまつている、ということなんて。まるでお風呂の栓を入れ忘れてお湯を入れたときみたいです。

とても賢いとは聞いていましたけど……それ以上、と言うわけですか。今よりも更に警戒度を挙げないと、あつという間に丸裸にされちゃいますね。

「ああ、すみません。思い浮かんだことは直ぐにメモを取る質なんですよ。」

「お待たせしましたが質問を続けますね」

「……ええ、どこからでもどうぞ」

ここからが正念場と言うわけですか。良いでしょう、受けてたちますよ。私の全身全霊を持つて彼女を……攪乱いたしましょう。

「んん、何だか今物凄くこのやり取りから逃げ出したくなつたのですが……」

「？ どうかいたしましたか」

「あ、いえそれでは続けますね。」

「首謀者は貴女ですか？」

「私がそんな面倒そうなことをするわけがないじゃないですか。」

「見てわかりませんか」

「では、あなた方はこれから何をする予定なのですか」

「サプライズパーティーです。いかにも頭の出来が知れそうですよね。」

「こんなことについて聞きたいなんて暇なのですか。」

「……ええと、それではこの土地の誰かと関係はありましたか」

「今ここで出会つた貴女ですね」

「つまり他にいないと？」

「いえ、他にもいますが？」

「……他にはどなたと知り合いなのですか？」

「はて、そんな他の人に迷惑になりそうな情報言える訳じゃないですか」

「ほう、迷惑になりそうな事をすると言うことですか」

「そうですね。まあ、この土地に入ってきて迷惑になりそうな事を起こさなかった者の方が珍しいと思いますけどねえ」

「どうして、そういちいちこちらを煽るような言い方をするんですか!？」

「はて、いつの間にか鴉天狗さんが涙目に。それに顔も赤くなってきていますし、どうしたのでしょうか。」

あと、最後の質問扱いで良いのですかね。でも、大して変なことはいっていないはずなのですが……。まあ、答えておいてあげましょう。

「えと、確かそう聞こえると言うことはあなたの方でそう聞こえてしまうような原因を作っているかららしいですよ？」

「あや、確かにそういわれてしまえば、心当たりが——」

「はい、なので悔い改めてくださいね。」

大丈夫です、謝ってちゃんと誠意を見せていただければ許してあげますから」

「この感情は間違いなくあなたのせいです」

？ 更に顔が赤くなつたのですが。

……はっ。分かりましたよ。感情という言葉といい、顔が赤くなることといい、もしかして恋ですね!？」

でもどうしましょう、私、同性の趣味は無いのですが……。そうだ、確かこう言うときは鈍感系主人公の真似をすればいいはずですが、相手の感情に気づかないふりをして面倒そう……。もとい、今は必要でないものを受け流せば話を円滑に進められますよね。

ふむ、ならばこうすれば話が戻るはずですよ。

「え、なぜそんな思考に至るんですか？」



そんなことがあるはずないじゃないですか。勘違いも甚だしいですよ、まったく」

「ええ、ハイそうですね!! 全部私が悪いんですね!?

そんな性格だと気づいてなお、質問を続けた私が全て悪いんですよ、どうもすみませんねえ!!」

「いえいえ、分かってももらえればよいのですよ。

まあ、もう少し早くしてくれればよかったですとは思いますがけどねえ」  
「~~~~~………!!?」

ふむ、あちらの事情も慮って、質問に指針が戻るようにして差し上げましたのに逆ギレするなんて、酷いお人ですね。あ、人じゃないのです。それに地団駄まで踏むなんて、余程の事なのでしょうね。

ま、今は気の迷いからキレられておりますが、後で私に感謝することになるでしょうね。

「……っ、じゃあ、こちらからの質問はこれで最後とさせていただきます。

色々と限界なので」

「ええどうぞ、自由」

私のターンも残っていますのでこれで終わりとはいきませんがね」

「では、最後です」

と、そこで息を整えるかのように一拍おきます。……恐らく質問の内容は決まっています、最初から。最初から、『最後に』聞くのが確定していたはずです。

そして、こちらもおそらくですが、私の予想と大して変わらない内容です。この幻想郷で『異変』とやらを起こした際にはたらく、いわば免疫機構。すなわち――

「博麗の巫女」

もう一度、今度は私の頭に染み込ませるよう、彼女は言葉を区切りました。

そうして、質問を始めたときと同じく瞳と瞳を合わせ、続けます。

「この言葉をどの程度まで知っていますか」

この念の入れよう、只の質問として流すのは得策では無いですが、これで私の方も情報の収集は終わってくれますね。てつきり、収集と依頼で二枚もカードを切らされてしまう、と踏んでいますが、親切な方なのが幸いしました。

とは言え。

相手が怒りを覚える精神状態だったとはいえ。

鴉天狗さん対面ですものね。私が思っているより多くのモノが持つていかれていると思います。我ながら、最初からなんとも面倒な対戦相手を選んでしまったものです。

さて、それではこの質問、どう答えたものでしょう。

まあ、私の頭ですし大して効果は効果を出せない物しか思い付きませんね。仕方ないです、ここは普通にいきましようか。

そこまで考え、私も鴉天狗さんのきれいな瞳を覗き返すようにして答えます。

「この土地の人間と同じくらいには」と。

「ふむ、成る程……あやや、ありがとうございました」

ペコリと頭を下げる姿は、何とも見た目相応の少女らしさがありました。

しかし、先ほどのやり取りを忘れてはいけません。あの大妖怪程では無いにせよ、けては侮つてはいけないほどの明晰な頭脳を持っていることも。私にとっては中途半端な力を持つものよりも、それは大きな意味を持っています。

「さて、それではこちらもお礼をしなきゃいけませんね。

どうぞ気ままに聞いて下さいな、何でも答えて差し上げましょう」

おどけたように、もしくは鴉のように両手を広げる彼女は、やはりどこまでも注意が必要な相手だどつくづくそう思います。多分、私からの質問でもこちらの情報を剥がせる自信があるからの、その態度なのでしょうね。これほど面白い情報タンクも、この土地では珍しいと聞きますし。

でも。

だからこそ信用できる。

では、老獺にて狡知に長けた鴉天狗さんにどれ程通用するかは分かりませんが、私なりの勝負を申し込みましょう。

その為にも少しばかり前哨戦と洒落こみますかね。

「それなのですが、少し条件を変えてもよろしいですか？」

「はい？ 条件を変える……？」

「と言つても、大層なことを頼むわけではありません。

それに、先ほどのやり取りで、私の知りたいことは全て教えていただきましたので……貴女が聞いたこと以上を察したように」

私が言葉を紡ぐと、彼女は少し表情を変えました。どうやら、少しはこちらのことを認めていただけたようですね。

さて、ここからが正念場ですね。

どれだけこの方を『こちら側』に引き込めるか、しかも相手の方から、とまで言いませんがそれなりに対等になるような同盟が望ましいです。

まったく、私はあの方と一緒にいればそれでいいのに……とは言え、あの方に全てを捧げると決めたのも私ですし、泣き言を言つても仕方ありませんか。少しぐらい、多くを望む癖を直していただければ、いいだけなのですがねえ……。

「あの方、それで条件と言うのは？」

「あ、申し訳ありません。少しばかり、このあとのことについて考えておりました。では条件はですね」

こうして、私のこの土地での初めての『戦争』が幕を開けるのでした。

「力を借りたいのは、貴女にとつては簡単なことです。

そう、少しばかりあることを拡散していただければ……」

空は相変わらず曇り空ですが、どうやら雨が降らない程度にはなりそうな天気となっていました。

「ではこれをお願いしましたよ」

「任せておいてください。寧ろ報酬のお釣りで家が買えそうな程のものを貰ってますからね。期待しておいてください」

先ほどとは打って変わり、彼女は興奮に翼をはためかせつつ、私に言も強くそう言いました。

まあそうもなりませんよね。私が迂闊にも色々落としてしまいましたし。しかし、それでもこの方相手になら大成功、いえ成功ぐらいを修められたので前哨戦としてはかなりの戦果と言えるのではないのでしょうか。半分ほどですがこちら側についているはずですし。

そんな風に私は安心していました。まあ、それなりの成功を納めたのであればどんな人間でもそういう風になってしまうのは避けられませんよ。

だからでしょう、彼女の発言が私の心に楔のように打ち付けられたのは。

「そうでした、お釣りがわりと言っては何ですがね。

貴女にちよつとしたことをお伝えしときましよう」

「はあ、そこまで自分を押し売りされても……だから売れ残ってしまったのでは?」

「たった今、お釣を渡したくなくなりました」

なんなのでしよう、渡すといったり渡さないといったり。情緒不安定なのでしようか。

私が不思議に思っていると、彼女ははあ、とため息をつくとなにかを諦めるようにゆるゆると頭を振りました。

しかし、そこから頭をあげた彼女の目には何一つの幻想も含まれていませんでした。

そこには先ほどまで、決して出していなかった『妖怪』が滲み出ていました。

「警告しておきましょう、名も知らない……そしてこれから知られる

であろう巫女さん。

どうぞ、博麗の巫女には精一杯の注意を払っておくことですよ。そして、軽く見ないことです。

さて、本当は負けてから知ることを教えてあげたのです。お釣としては充分ですよね？

では私はこれにて。また三日後に。」

それだけ言うと彼女は文字通り、目で追えぬ速度でその場から消えました。

彼女の残した言葉は、警告と言っていました。

「ただの予言……いえ確定事項、まるで予定ですね」

事実、先ほどの彼女の言ったことのように、その存在を甘く見た人はそれこそこの土地に入った者と同じくらいいたのでしょうか。ですが

「その程度の警告で止められるほど、私は『私』ではありませんよ。

それに私がその巫女さんの例外と成るのなら、それはとても面白いことではありませんか？」

そう、私は虚空に向かって問います。

いなくなつたはずの誰かへ向けて。

そして、自分自身を鼓舞するために。

神社の中へと入る前に私はもう一度、後ろを振り返りました。

そこはもう普通の景色ではありません、少なくとも私にとっては。

世界のどこよりもそれはそれは残酷に、そして美しく私の目に映り込むのでした。

ふと、上を仰ぐと灰と青の混在した視界に一枚の黒い羽が舞っているのでした。

まるで、私のように。

巫女さんに異変解決を求めるのは間違っているだろうか

私の名前は博麗霊夢。この幻想郷において管理者として振る舞うものの一人よ。

突然で悪いけど、少し私の独り言に付き合ってもらおうわ。別に大したことじゃない、ただの自己紹介みたいなもの。面倒だって思ったなら適当に聞き流してくれてもいいから。

さて、まずは前提として。

私はこの幻想郷でかなり強い部類に入る。

流石にどっかのバカのように最強とまでは言わないけど、上位者と当たっても臆さずに挑めるぐらいには自分の力に自信がある、と言えば伝わるかしら。

勿論、人間である以上限界はある。強いつていったって空腹にはそんなこと関係ないし、そもそも正面から当たれば勝てるかどうか怪しいやつだつて何人いるか……。

それでも、私が管理者の一人としていられるのは二つ理由がある。

まず一つ、管理者の一人は人間と妖怪のバランスを保つ意味も込めて人間でなければならぬこと。

二つ、その中でも最もその役に適性があるということ。

その二点に私は見事はまったと言うわけ。適性についてすべて語るつもりは無いけど一部だけ出すとすれば、『出来ないことは出来ないのに、できることはできる』。そんな分かりやすさと、人の身の範囲でという制限はあるものの出来ることの広さ。そしてそれが今代の『博麗』に求められたことでもある。

しかし、どれだけ適性があろうと私はそれを伸ばすつもりはない。本人にその気がないもの、これじゃあ伸びるものも伸びないわね。そもそも私にとっては努力なんて無駄って認識しかないし。

だから、私は天才と呼ばれるが決してそんなものなんかじゃない。むしろそんな称号はつけられるだけ迷惑なものとかさえ思っている。

最初にいった通り、確かに他より強いがそれだけなのだ。まあ、それだけであるのに修行を怠けているのもまた私の実態じゃあるけどね。

能力はあるが、経験が足りない。

それが私の総合的に見た判断じゃないかしら。

後に、ある女の子にこの話をしてみると

『強くてにゅーげーむをしているみたいですね。それも前のでーたは無しで』

と言っていた。意味はわからなかったけど、要はく成長が見込めないのにその遊戯を続けている状態>と言うことらしい。

補足気味に苦笑いしながら付け加えられた言葉になるほど、と思った。

まさにぴったりと当てはまっている気がする。特に成長が見込めない、と言うのが精神や経験的な部分も含められているのなら。

もうひとつ、あの子から何か言われたのだけど、そっちは忘れてしまった。前の言葉に深く領きすぎて聞き逃していたんだろうけど、大事な言葉だった気もするから不思議だ。

一体なんだったか……でもまあ、思い出さなくなったら思い出すでしょう。

そんな努力を放棄している私だからなのか。初めて出会ったときにあの子に怒りを覚えたのは、或いは必然だったのだろう。……まあ、異変の最中で気が立っていったって言うのも否定しないけど。

努力する必要がない、あるがままに自分を受け入れる姿に。

あるがままに『自分』を消してしまっていた危うい精神に。

私の勝手な理想を押し付けて——植え付けしまったのもまた確定事項だったのだろうと思う。

\* ~~~~~ \*

「はあ〜……」

吹く北風と一緒に溜め息を乗せてみるけど、気分は全然よくならな

い。むしろ、気怠さが増したただけかもしれない。気を紛らわすために始めた境内の掃除も、寒さで気が滅入っただけだった。

幻想郷に変化が訪れたと感じた日から、既に二日目の朝になっていた。

なんにも変化がないまま。

結局あの後、待つていた文は戻って来ないし、異変は起こらないし、紫とも連絡が取れないしで、なんだか色々不完全燃焼ぎみでモヤモヤと過ごしていた。別に紫が心配なわけじゃない。倒しても死ななそうだし、そもそも倒せなさそうなもの。でも、そんなやつから一切の接触が無くなった、なんてなったら気味が悪いでしょう？だからあいつを案じているとかじゃないからね。……誰に弁解しているのかしら。

それに奇妙なのはこちらの事情だけじゃない。

今日で二日経ったことになるけど、新しく入ってきた奴らの動きが一切わからない……と言うか、なんの動きも無いのだ。姿形すらも見えないというのがその不信感を更に募らせる原因となっている。何も無さすぎて、ともすればそれがあつたことを疑ってしまうぐらいに。

変化と言えば、流れつく外来品が増えたぐらい。だけどそんな事なんて波のようなもの、多いときもあれば逆に少ないときだってある。全く関係がないとは言わないけど、ただの副次効果でしょうね。

さて、どう出しましょうか。一応、胡散臭い妖怪のどっちかが連絡してくると思っただけ待機していたけど、これ以上ここでじっとしていても意味はなさそう。でも、闇雲に動いて裏で何かされているのも長丁場になりそうで嫌だし……。むしろ、嬉々としてそう行動されそうな予感もするのよね。うーん、せめて二人いれば……

「おーい、霊ー夢ー！

異変だぜー!!」

「でかしたわ、魔理沙。

良いときに来てくれたわね」

本当に丁度いいわね、タイミングがよすぎて疑いたくなるぐらい。



空から降りてきたこの人間こそ『普通の魔法使い』こと霧雨魔理沙。簡単に言えば私の悪友というか、ライバルというか……って大して簡単に説明できないわね。まあいいか、どうせ私の感覚の問題だし。

さて、魔法使いと言えば三角のどがった帽子とローブを想像すると思うけど実はこいつにそれは当てはまらない。いや、半分は当たってるのかな。白いリボンをつけた黒い三角帽子に、魔女というよりも家政婦さんの着ているような服をこれもまた白黒でまとめたもの。ご丁寧に、何故かエプロンまでついている。癖っ毛な長い金髪は、こいつの元気を表しているようね。意思が強そうだけど、明るく煌めく目も性格を知るのいい指針となるでしょう。

なんというか、こいつほど見た目が中身を表しているやつも珍しいわよね。

すると、じろーつと見つっていたのが悪かったのか何故か魔理沙が慌て始める。

「何かあったのか……って、違う違う、何かあったのはこっちの方なんだよ！」

とにかく。お前のは行きながら聞かせてもらうから、今は急いで準備してくれ!!」

「急いでって……例の奴らならまだ動きがないから大丈夫よ。ほんとに危険なら紫から藍か橙が伝言しに来ると思うし」

「は？ 例の奴ら、ってなんのことだ？ というかもしかしてお前、今何が起きているか知らないのか!？」

って、ああそうじゃない。とにかく早く人里の方に来てくれよ!」  
今何が起きてるかですって?……て、ちよつとちゃんと説明してから——ああ、行っちゃった。

私の制止の声もむなしく魔理沙は飛んでいってしまった。伸ばした手が少しバカっぽく見える。

はあ、仕方ないわね。取り敢えず魔理沙の言っていた通り人里までいってみましようか。そこまでいけばアイツともう一回合流できるわけだし。それにホントに異変が始まっているなら、途中で妖怪とか妖精とか消し飛ばせば丁度いい練習台になるでしょ。

方針が決まったので、準備をするためにホウキを納屋へと放り込む。別に魔理沙に期待を外されたからではないけど、投げ込むとき微妙に力がこもってしまったのは別のはなし。

／＼（我、お払い棒也）

人里の入り口に降りると、魔理沙が気づいて走ってくる。

微妙に不満げというか、機嫌悪そうな顔してる。普段なら、面倒だから事情だけ聞いて離れるんだけど……そうもいかないのよね。

「遅すぎるぜ霊夢、あんなに急いでくれて言ったのに」

「あんたが私の準備を待ってくれなかったからでしょうが。おまけにろくすっぽ説明もせずに行つたからこつちは頭が疑問符でいっぱいよ！」

「？ お前ならもう知つてると思つてたんだけどな。」

まあでも、飛んできたつてことはもう分かつてるだろう？」

「……ええ、大体はね」

確かに上空から見るとそれは一目瞭然。

ここ人里の近くには、私たちもよく入り浸っている店で『香霖堂』つていう変な店があるんだけど、ソコに長蛇の列ができていたの。

あそこは変なものばかり置いてあるし、そもそも店主が商売に向いてない性格だから、普段は人が寄り付かない。悪く言えばガラガラ、よく言えば静かで落ち着いているから私たちもソコに行くことが多いのだけど、今朝は全く真逆だった。

これの示すところはただ一つ。つまり――

「そう、香霖堂が繁盛する異変だぜ」

「私の珍しいボケのターンをとらないでくれる？」

「冗談はさておき」

「聞けよ」

「この前の『あれ』は勿論知ってるよな」

「……ああ、この前のでかいのでしょ？」

さつきもいった通り、何にも動きはないわよ。あの規模が動くなら

私が気づかないはずないでしょう」

と言うか『あれ』で伝わっちゃう辺り、本当に衝撃的だったのね。今の話で通りすぎてく人間も何人か反応していたし、早めに解決しないと不安に思う人も出るかも知れないわ。

でも、わざわざここで言ううってことはその事ではないわね。香霖堂の盛況ぶりといいもしかして……

今にも説明してやろうと、目を輝かせた魔理沙の口を遮り予想を口に出す。

「もしかして外来品のこと？」

途端に唇を尖らせ、面白くなさそうな顔をする魔理沙。どうやら当たってみたいね。ふふん、魔理沙が私の上をいこうなんてまだまだ早いよ。その顔はかわいいと思うけど。

でも、理由はどうあれ説明を遮ったのは悪かったわね。詳しいことも知らないし……それに可愛い顔も見れたし。折角だから、ちゃんと聞いてみましょうかね。

「なんだよ、やっぱり知ってるじゃないか」

「ただの勘よ、もしくは予想ともいうわね。だから、あんまり詳しくないの。」

よければ説明してくれるかしら、頼れる魔法使いさん？」

「ええー？お前に言われても何か裏があるんじゃないかって思うんだけど……ま、いいや。仕方ないから説明してしんぜよう」

「ありがたき幸せー」

割りとちよろいのよね、こいつ。口じゃ仕方なさを装っているけど、さつきまでとはうって変わって機嫌が良さそうになってるのがよく分かる。軽口もその現れね。

しかし、承諾してくれたはずの彼女はなかなか喋り出そうとしない。なんでさつきからしきりにまわりを見渡して……ああ、そう言うことね。

「魔理沙」

「もう少し待ってくれ、今話すのはちょっと」

「いつものとこにいくわよ。……最近食べてないし」

「ん？……って、そうか。了解だぜ」

確かにこんな場所で話してたら、どこぞの鴉どころか誰にネタにされるか分かったものじゃないわ。警戒して当然ね。

一旦、異変の話は置いて、さつきと向かいましようか。

そうして、私たちは足早にいつもの場所——お気に入りの甘味処へと歩き出すのだった。話をするためか、それとも甘味目当てかはどちらでも声に出さなかったけど。

Now Lording / (少女祈祷中)

/、

「……って、ことなんだ」

と、そこまで一気に喋り終わると、彼女は団子を口に放り込んだ。ホント幸せそうに食べるわねー。

口に入っていた分を飲み込み、今度は私が口を開く。

「取り敢えず、要点まとめてみましょうか」

魔理沙がこし餡の団子をモグモグしているので、指を一本立て彼女の注意を団子からこちらへ寄せる。

「まず一つ」

視界の端を見慣れない物体が横切っていくのを横目に、最初の一つを口に出す。

「外の世界の品が異常に入ってきていること」

魔理沙が団子を飲み込みつつ軽く頷く。

いつもより多いのは知っていたけど、まさか香霖堂があんなになるぐらいだったなんてね。魔理沙の言によれば一つの家庭に十個ぐらい配れそうなほど、らしい。道行く人も一人一つぐらいは幻想郷で見ない……なんというか異質なものを持っていたし。始まりは他の二つと同じように、そして予想通り『あれ』が起こった頃かららしい。さつき横切っていた謎の物体(円くて銀色で平べったかった)も多分その一種だろう。

続けてもう一本指を立て、そのまま通りの外へと指し向ける。

店のまん前、当然往来なのだがそんなことも気にせず二人の男性がつかみ合っているのが見えた。

「ただ、これはまだ甘い方だ、少なくとも今日見た限りでは。」

「二つ目。何故か里の人たちが凄く苛立ちやすくなっていること」

しゃべると同時に殴りあいはじめたので、そちらに小さくした陰陽玉を投げて後頭部にぶつけた。魔理沙が引きつった顔してたけど黙殺。大した霊力も込めてないししばらくしたら起きるでしょ、起きたら凄く痛むと思うけどね。

実はこれが初めてでなく、今の人たちのようないざこぎは、この店に向かう短い道のりの中でも少なくとも五回以上は見ている。その内一件は刃物まで取り出していたので、急いで蹴り飛ばしたけどね。偶然で済ませるには少し多い回数。それに、甘味を食べていても、どこかピリピリとした雰囲気か店の中に漂っているのも感じる。

「そして三つ目。お金と品物が入れ替わる」

指を立てつつ、警戒の意味も込め周りを見渡す。特に何も見つからなかったが、一応意識は配っておいた方が良さそうね。

何故警戒するかと言えば実はこれが一番厄介だからだ。何せ、他二つとの関係性が分からない。ま、実際警戒する必要がなさそうな気もするのだけど、これまでの相手とは少しばかり毛色が違う相手だ。警戒しすぎってことはないでしょう。

さて、この三つ目の詳細だがいつの間にかお金とものが入れ替わっていると言うもの。ただ無くなるのは品物で、代わりにおいてあるのがお金だと言う。しかも、値段ちよつきりにおいていつてくれているらしい。実害は今のところ無いみたいだけど、店主さんも気味悪がっているから優先して退治するつもり。

無くなるのは主に食材。ただ最初だけ他の店からもなくなっていたみたい。

さて、とりあえずこれで全部のはずだけどまだ何か隠していそうねこいつ。団子を食べてるからってのもあるだろうけど、一言も口を利かなかったのはおしゃべり好きの魔理沙にしては珍しい。そして、そう言うときは大抵重要そうなにかを隠していることも知っている。

問い詰めてやれば吐くかしらね、吐くといつても団子がぎりぎり位で。

と、そこそこ外道なことを考えていると、当の魔理沙が口を開いた。

「……なあ、今回のお前なんかおかしくないか？」

「突然口を開いたと思ったらなに、失礼なやつね。少なくともいつものあんたよりか自分を信用してるからそんなにおかしくないわ」

「ちよつとはおかしいってことじゃないか。それに私は自分を信用してるんじゃないかって私の積み上げたものを信じてるんだよ」

そういうと、近くに来た店員さんに追加で羊羹とお茶を頼み、残っていたお茶をのみほし口を湿らせた。

「何時のお前なら勘にしたがって動くじゃないか。」

私からモノを聞いたりしないでき。そう言えばお前の方の事情も聞いてやるって言ってたな、ほら何があったか話してくれよ」

「……別になにもないわよ、あんたに話すことはね」

そう言つて、来た羊羹を切り分ける。

「そんなこと言わずにさ」

いつの間にか往來の男たちはいなくなっており外の様子は元通りになっていた。

「私ら友達だろ？」

羊羹を切り終えると、一切れを口に放り込み、変わらずに美味しい味だと嬉しく思いつつ味わう。

さすががこの羊羹ね、甘さもそこまでしつこくないし上品な舌触り。この値段で——

「なんで話してくれないんだよ」

ああもう、うっさい!!

わざとゆつくり羊羹食べて無視してるのに、少しも堪えていないってどういうことよ。

ただ、こういうときの魔理沙がしつこいことを私は知っている。多分、周りのやつを心配しすぎる遺伝子でも入ってるんでしょうね。ただ単に興味があるだけかも知れないけど。それは常時であれば好ま

しく思うのだろうけど、今は少し鬱陶しい。

……でも、こういうときに根負けするのは大体私だ。ずっと昔からそうだった。

「……はあ、仕方ないわね。大した理由じゃないわよ？」

「別に気にしないぜ。全く最初から素直に話せばいいのにさ」

「うるさいわね。で、理由なんだけど……今回のやつがいつもと毛色が違うのは知っているわよね」

「出てきてすぐに行動をおこさないとか、か？」

「そう、他にもあるけどそれが一番ね。」

だから、何時もより警戒しておいた方がいいんじゃないかって。

あと、この前のアレから紫の消息が分からないのよ。結界は持続しているんだけど……」

「ん？ それって結構一大事じゃないか!!」

もしかして、結界が弱まっているからこんなことになっているのか？」

「あんだ、よくそこに気づいたわね。その通りよ、ただ、弱まっているって言っても、まだ幻想郷に影響するほどじゃないわ。だから、物品だけで済んでいるとも言える」

「このままだとそれだけじゃすまない、って聞こえるけど」

「さあて、ね」

こうしている間にも、非常にゆっくりとだけ結界が緩んでいる。放置していたら、バランスが完全に人間に傾くだろう。そして、それを防ぐように力のあるやつらが動き出せばそれこそ破滅の一途をたどるのみ。

でも、恐らく今のところ心配はいらないはずだ。アイツはそういうところのセイフティを付けないほど、甘い頭脳はしていない。アイツの辞書に『自信』はあっても、『慢心』の文字はないから。自分が負けると思っていないくても、失敗したときの手なんてそれこそ幻想郷の住人以上に用意してあるでしょうね。

「とはいえ、ね」

「ああ、早く解決するに越したことはない、か」

決意と同時に最後のようかんを口にほうばる。見れば、魔理沙も最後の一切れだったらしい。お茶も飲み干して立ち上がると、魔理沙が右の拳をつき出してきた。

ふふ、面白い、私によりによってその勝負で挑むだなんて。ちょうどいいわ、前回の雪辱、今ここではらしてあげましょうか。

思いを込め、魔理沙を迎え撃つようにこちらも拳を彼女に向ける。勝負は一瞬で終わる。その前段階にどれだけ自分の実力を拳に込められるか、そして少しばかりの神の祝福をどちらが受けられるかでの勝負は決められると言っても過言ではない。私は十分に溜め終わった、私の勝利は確定している。

相手も気合い十分。いよいよ始まる、刹那の交錯が。

「さあ、覚悟はいいかしら？」

「泣きを入れるのはお前の方だぜ、霊夢」

啖呵を切りあい、相手の目を不敵ににらみ返してやる。

合図は自分達でかける。

せーのっ

「じゃんけん、ぽんっ!!」

私はチョキ。対して魔理沙の手は

「くっそー、負けたー!!」

本人の明るい性格と同様にパツと開いていた。

残念だったわね、魔理沙。私はじゃんけんでただの一度も負けたことは無いの。相手が悪かったと思って諦めなさいな。

渋谷店員さんのところまで二人分の代金を払いに行く魔理沙を横目に、私は意気揚々と外へ出る。見上げた空は清々しい程の青空だ。まるで、今の私の心みたいにと、ちよっぴりゲスみたいなことを考えていると、魔理沙も出てきた。

「払ってきたぜ。で、結局どうするんだ？」

「ああ、明日から本格的に調べることにしたわ」

「明日？ 急がなきゃならないんじゃないのか」

「急がば回れって言うじゃない。それに明日で三日目、動くとしたら明日な気がするのよね」



「根拠は？」

そう聞いてきた魔理沙にブイサインとウインク付きで、言葉を返す。

「もちろん——勘よ」

「……だよなあ」

魔理沙があきれた表情で私を見るが、こればかりは仕方ない。私の行動の切っ掛けは大体が勘だからね。それに確かに警戒しなきゃいけない相手だけど、動かないわけにはいかないでしょう。そのタイミングを決めるのには私の勘がピッタリだし。勘に頼りすぎはよくないけど、そればかり気にしすぎていたら動くのが遅くなっちゃうからね。

まだ微妙に納得していなさそうだけど、無視して話を続ける。

「さて、そうと決まれば早く明日の準備しておかなきゃね。」

主に宴会の準備を。料理は……早苗に頼もうかしらね」

「気が早すぎるんじゃないか？」

「そう言うのを捕らぬ……ええと確か狐の皮算用っていうんだぜ」

「それって、狸じゃなかったっけ？」

「ママゾウから教えてもらったんだ。外の世界じゃこつちの言い回しの方が一般的らしいぜ」

「ふーん……まあ、あんたが来なくても宴会は滞りないから別にいいわよ。」

今回は外から色々入ってきてるから珍しい食べ物あると思ったんだけどなあ」

「おいおい、誰も『いかない』何て言っていないだろ。」

「私はもう少し情報を集めるとするぜ」

「任せたわ、鴉天狗並みにかき集めてきなさい」

「はいはい、仰せのままに」

人里を歩きつつ、どうでもいいような会話を交わす。

気ままに魔理沙と話し合うのは割りと楽しい。何年も一緒にいる

ため、お互いの気性を良くわかりあっているから。ああ言えば、こう返してくれる。会話はポンポン弾みあつという間に人里の出口までついてしまう。

「じゃ、私はここで」

「ええ、また明日ね」

別れは短く、行動は早く。挨拶を交わした直後、私たちすぐに別々に飛んでいく。

やっぱりあいつ、今回の異変解決を狙ってるわね。外から色々入ってきているもの、収蒐家のあいつとしては堪らないはず。いつもなら私と情報交換なんてしないで勝手に動いているのに、今回はしているのも慎重に動かためでしょうね。まあ、収蒐癖をこじらせて私に向かつてこないだけまだいいか。その理由だって首謀者ならいいの持つてるはず、つてだけだろうけど。

邪魔するなら首謀者共々ぼこぼこにのしてやるけどね。

そんなことを考えながら、私は神社までの道（空だけど）を行くのだった。

あと一步のところ、考えが届かずに。

□□□／、□□□

人里――

二人の少女が飛び去っていった後、その後ろ姿を見つめているもう一人の少女がいた。その少女は二日前鴉天狗と話していた少女であつた。

少女は里の道の真ん中に立っていたが、誰も彼女に目をくれない。しかし少女のまわりは不自然なほど人が寄り付いていなかった。

「恐ろしいですね……」

思わず漏れた、というようにその言葉にはその言葉の軽さとは裏腹な重さがこもっている。何故なら

「たまたま近くにいたとはいえ、姿を隠した私の言葉に反応するなんて」

巫女が店から出てきたあと、彼女は丁度そこにいた。

と、言うより丁度その時に歩きながら

『遂に明日ですね〜』

なんて呟きながら歩いていたのだ。

巫女には聞こえていなかったはずなのだが、その超人的な第六感にでも引つ掛かってしまったらしい。

しかし、予想もしない方法で自分の考えが読まれたというのに彼女の表情に焦りという感情はなかった。むしろ、相手に十分と不適な笑みを浮かべ上空を、飛び去った方を見据える。

「ですが、この勝負。やはり勝つのは私たちみたいですね」

私にあなた以上の油断はない。

そう呟きながら、少女は人混みへと消えていく。彼女らとは別の方向へと。

／＼（少女就寝↓起床）

私の安らかな眠りは唐突に、そして乱暴に破られた。

突然の轟音に慌てて飛び起きると、私の枕から二十センチぐらいの位置に突き刺さっていたのだ——新聞が。

「くおの……あやあーー!!!」

殺す気がツツ!?

絶叫と共に吹っ飛んだ障子を横にぶん投げる。あんのバカ天狗う

!!

外へ走り出すと、今もつとも会いたいヤツが空に見つけた。

「おはようございます、霊夢さん♪」

手まで振ってるんだけど、どう料理してほしいのかしらねえ……!

「あや、あんたいい性格してるじゃないの」

「いえいえ、今の霊夢さんよりはしてませんよ」

「降りてきなさいっていったら」

「そんな地獄の一步手前みたいなところに降りるわけないじゃないですか、あっはっは」

冷や汗をだらだらと流している文。

どうやら、ようやく状況がわかったみたいね。でも、もう遅いのよ。

文の逃げようとする動作に合わせて術を発動させる。

すると、愛らしい焦った顔が目の前に。混乱に変わるまでに、その腕をがっしりとつかみにつこりと笑いかけてあげる。

「え、ちよ、え!?!」

「さあ、文。あんたの罪を数えなさい」

「ちよちよとまってくださいそんな物騒な針はしまつて話し合いましょうそうです私が調子乗ってました今度からは馬乗りになって起こしてからにしますごほうび付きで嬉しいと思いませんかもちろんそれもネタに使わせてうしろのめりいさん!!!?」

／＼（少女制裁中）／＼

今度やったら、目刺しにしてやりましょう。

ぽいっと動かなくなった天狗を放り出し、私は朝食の準備を始める。

あ、そうだせつかくだしあいつの持ってきた新聞も読んであげましょうか。異変の手がかりが乗ってるかもしれないし。

しかし、さして期待せずに手に取った新聞に思わず目をむく。

何故ならソコにはこうのついていたから。

『博麗の巫女、本日より異変解決を開始。』

外来品は多く確保し、隠蔽しなければ巫女に処分されてしまう可能性大』

目を疑う。そして、もう一度見直してから、ポツリと言葉がこぼれる。

「やられた……」

嫌な一日になりそうだ。

そんな私の眩きは、強くなってきた風に吹き散らされてしまうのだった。

天浮女と星瞬女（てんぷおんなとせいしゆんおんな）

「と言うわけで、今から特攻をかますわ」

「話が前に進みすぎなんだよなあ……」

「私たちには、何より時間が足りないのよ。こんなところで立ち止まってなんていられない……っ！」

「そういうお前は普通に朝食を食べているわけだが」

「それはそれ、これはこれ。腹が減っては戦はできないのよ」

「特攻ってことはそれが最後の晩餐にならなきゃいいな。飛んで特攻するとか爆破落ちしか待ってないんじゃないか？」

「やめなさい」

命を最後まできっちり国のために使った大和の特攻隊を悪く言わないの。あの人たちは信念を最後まで貫き通した真の英傑よ、使う上が無能だっただけでね。……あら、この話題は色々不味いわね。

朝食の最中に魔理沙が来たので適当にあしらいつつ、急いで食べ進める。ちなみに朝食は、麦飯＋トロロと焼き魚にお味噌汁。たまに麦とろご飯食べたくなるのよね。……美容にもいいらしいし。

それにしても、魔理沙がこんな朝早く来るなんて久しぶりだ。

今は日が上ってから、一刻か二刻ぐらいの時間帯。普通なら、どこの家も今ぐらいに起き出して私と同じようにご飯を食べ始める。まあ、さつき急いで逃げていった鴉天狗は新聞を配るときだけ、その時間帯より早く姿を見せるけど。

それはそれとして、魔理沙が来た理由は察しがついている。

「で、結局どうするんだ？」

麦飯を口に運んでいると、唐突に魔理沙が聞いてきた。

どうするって言うのは、間違いなく新聞のことだろう。でも、聞かれたところでいつもと答えは変わらないのよね。

ゴクンと飲み下し、普通の調子で言う。

「もちろん、立ちふさがるなら潰す」

私の声に一切の覇気も迫力もない。だけど、それがただの軽口の筈がない。

何故なら、それは私にとっては息をするのと同じぐらいごく自然なことだから。邪魔なら、弱かろうが強かろうが区別はない、等しく叩くのみ。

だって、私は幻想郷一無慈悲のある巫女だもの。

魔理沙が呆れたように頭を振るけど、これまたいつものことだ。

「じゃあ、基本はいつも通りな訳だ。

というか、私も私で新聞の見出しを見て急いできたから、正確にわかかないだよな。

今、どういう状況なんだよ?」

「相変わらず結果を急ぐやつね、ちゃんと全部見てから来なさいよ」

ご飯食べてるのに説明しなきゃならないじゃない。

しかし小言を言ったところで魔理沙はそっぽを向いて、片手を私の焼き魚に……つてこら!

ベチイっ。

伸びてきた手を平手で思いっきり叩いてそらすと、何だか痛そうな音があった。若干、涙目でこつちを見てきているけど、顔を背けて無視。ふんっ、人のご飯に許可なく手を出すからそうなるの、因果応報よ!

結局、話は時間がないにも関わらず朝食後になった。お茶を出しつつ説明を始めようと口に出す。

「いっても、見出しだけでも見てきたんなら少しはわかるでしょ?」

「情報戦が好きだってことはな。あの鴉天狗まで焚き付けてよくやるぜ」

「目的を完遂させるまで、身内同士で争わせて消耗させるのが目的か……嫌らしいわね」

「ああ、消耗したところを最初のうちにバシッと叩こうって魂胆だな。

あのスキマ妖怪ほどじゃないが、面倒な手だぜ」

「うん……うん?」

「え」

「え」

「……………」

「……………」

あれ、なんか認識にずれがある気が……。

私は、首謀者側の目的が終わるまで私たちの相手をしたくないから、地域のものたちに任せようとしてるんだって思っていたんだけど。

しかし、魔理沙の想像、いや推測は私のそんな考えのもつと上をいっていた。

「今日から本腰を入れて私たちを叩くからこんな記事を出させたんだろ？」

私たちが消耗して目の前に来たのを倒して安全に異変を完遂させようとしてるんだよ」

「そんな……いやあり得ない、あり得ない。だって、私たちまだ首謀者がどこにいるのかさえわかってないのよ？」

それなのにたどり着くことなんて」

「多分、もうきつちり姿を現しているんじゃないか。それに昨日の時点でどの辺にいるのか、それなりに検討はつけられるぞ」

「え、は」

「どの方角かまではさすがにわからんが、人里の近くにいるのは確かだな。」

それに人間が混じっているはずだ。食材がいるのは人間だけだろうし、道具も合わせて買ってるんだから間違いない。全く関係ない外来人って線も無くはないが、姿が見えないってんならそれは薄いぜ。首謀者のように隠れる必要はないはずだからな」

「……」

さすがというか、なんというか。

ごく普通のような顔をして語る彼女を前に、私は目を白黒させることしかできない。驚きと未知の連続すぎる。とはいえ、言っていることは言われればなるほどと納得出来るものだ……それに気づくのが難しいのだけだ。

そういえばこんなやつなのよね、こいつって。観察眼が他の人の何倍も優れてるし、普段の技とかで隠れてるけど意外に常識はあるし。

天才的な閃きがあるわけではないんだけど、得たものをつみあげるのはいつの得意分野でもある。とはいえ、このままじゃなんだか癪だ。でもちよūdい反論もないし、話を変えることぐらいしかできない。

「と、とにかく」

コホン。

と、動揺を悟られないよう極力努めながら話を前に進ませようとする。

「そこまでわかってるんだからさつきと行って倒しちゃいませよ」

「そーだな、どっちにしる早くしないと来ちやうからな」

「は？ 来るって何がよ」

「何が、って忘れたのか。新聞見てるやつの中で反応しそうな輩だよ」

河童とかな。そう言葉をくくって呆れたようにこちらを見る魔理沙。いや、さつきまで覚えてたんだって。ちよつと出てこなかっただけだから。止めなさい、そんな目で見ないで！

区切りの空咳が完全に空振りした瞬間だった。

「……さあて準備も終わったし、頑張ってみようかしら！」

「ごまかしても無かったことにはならないからな」

こうして。

ぐだぐだのまま今回の異変解決が始まるのだった。

……割りといつも通りでもあるけど。

少女祈禱中

空というものはいつでも私に色々なものをプレゼントしてくれる。飛ぶ鳥のその自由さへの憧れ、刻一刻と変わる景色の雄大さ、はたまた何も用事がない午後を楽しく変えてくれる友人を連れてきてくれたり。

もちろん、良いことばかりであるはずがなく、時には私にとって好



ましくないモノだつて中には含まれる。出掛け先に意思をくじくかのような雷雨や、自分の感情を嘲笑うかのように変化する天候なんか、誰にでも経験が有るんじゃないか、と思う。

だが、私はそれらを一度も無意味なモノだと認識したことはない。何故ならどの経験だつて好き嫌いの程度こそあれ、教訓や気持ち、一時の出会いを私に与えてくれるから。それらはどんなときでも私に必要なモノであつたから。

だから、空がつれてきたこの小さな来襲者も何かしらの意味を持っているに違いない。

そんなことを思いつつ、私は人里に向かう空の道の途中で止まる。人里まで一直線に飛んでいた私たちの目の前に突然、立ち塞がる（飛び塞がる？）ように奴が来たからだ。

ソコにいたのは――

「やい、れーむとマリサ！ここを通りたきや、さいきよーなあたいと勝負しにや…ぬ、にや…しろー!!」

相も変わらず能天気な氷の妖精であつた。登舞台詞を噛んでもそのままやるとは恐れ入るわ。

しかし、その登場を受けて私と魔理沙は思わずお互いの顔を見合わせしてしまう。正直、私としてはこの場面でこいつに、というかほとんどの奴に会いたく無いんだけど。急いでるから、手加減できそうに無いし。

面倒そうな視線を送つてみると、意味が伝わったのか苛立たしそうに背中の水柱みたいな羽をバタバタとしはじめる。

「なによ、するのকাশないのかハッキリしろーっ」

「はいはい、相手してあげるからそうかっকাশないの」

「そうだけ、チルノ。あんまり怒つてると溶けるかもしれないぜ」

「え、そうなの？　じゃあ、怒るのやめる！」

そういうと、彼女はそれでも落ち着かなそうではあるものものとりあえず口を閉ざした。

この見るからにおろ…：教養が足りなそうなこいつはチルノ。水色…いや氷の色をした短髪に子供っぽい顔と体躯。寒色系のワン

ピースが大変にあっているけど、背中の氷柱が6本集まったような羽のせいで普通の子供には見えない。その正体は氷の妖精（ちなみに近くに寄るといつもは寒くなるのだけど、今回はあんまり気にならなかった）であり、毎度毎度異変が起こる度にお祭りのような雰囲気のにせられて私たちに突つかかってくる面倒な奴でもある。

面倒な理由は他にもあって、それはこいつが強いからというものだ。幻想郷全土で見ればこいつより強い奴なんていくらでもいる。だが、『妖精』というくりで見ればこいつはそのなかでもかなり上位の実力を持つているのだ……頭はあんまり変わらないけど。まあ、そんなわけで他の妖精とは異なり、倒すのに一撃と言うわけにいかずそれなりに時間を取られるため、時間が惜しい今のような状況じゃ面倒な相手なのだ。加えて私のは火力で押しきると言うより、時間をかけても仕留める、もしくは手数で攻めるタイプだから余計にそう感じる。

そんな風に、私はすっかり一人で戦う算段を立てていたが、よく考えてみれば私は一人でここに来ているのではない。

私がどうやったら早く目の前の奴をどかすことができるか、と考えていると魔理沙が横からこしょこしょと話しかけてきた。

「なあ、霊夢」

「(なによ、私は今私のために考えてるの。邪魔しないで)」

「(いや、早く通りたいなら私がやった方が速いぜ)」

そういうと、彼女は懐から爆弾みたいなのを出してもてあそび始める。

これは自信があるときのこいつの癖だ。たまに失敗することもあるから、過剰に信頼はできないけど……なにかあるというのなら、任せてもいいかもしれない。

「(だろうけど、それは私よりも火力が少し高いからでしょ)」

「(いやいや。まあお前が任せてくれるってんなら、すぐにもお披露目してやる)」

「(ふうん、じゃ、頼んだわよ)」

取り敢えず魔理沙の邪魔にならないよう後ろに下がる。さて、お手

並み拝見といきましようか。

私が見ていると、魔理沙は懐から瓶のようなものを取りだし、なにげにずっと待っていてくれたチルノに親しげに話しかけにいった。

「おーい、チルノ」

「なんだ、さいきよーのあたいににか用か」

「お前が先に呼び止めたんだろ。ほら、お前のいった通りに勝負してやるぞ」

「本当か!？」

「ああ、ただし私のなぞなぞに答えられたら、だぜ」  
「望むところだ!」

と、そこで魔理沙はさつき取り出したものを見えやすいように掲げた。

「じゃあ、今からこの瓶を下に向けて投げるぞ。その瓶を探してきて、中に入っているなぞなぞを解けたら約束通り勝負する。

自信がなければやめてもいいぜ?」

チラチラとそれを振りつつ、反応を見るように言葉を止める。こつちからじや見えないけど、さぞ挑発的笑っているんでしょうね。

その証拠に、チルノはますます羽を激しく動かして叫ぶように返してくる。

「もちろん、やるに決まってる! なんだって、あたいはさいきよーだからな!!」

「よくいった、お前の勇氣には感服するぜ。それじゃ——取ってこい!!」

あーあ、あんなに遠くに投げちやって……。チルノも必死になつて取りに行つてるじゃない。それに——

「ねえ、魔理沙」

「ん? ほら通せんぼはなくなつたんだから早くいこうぜ」

「あんだ、あいつがどんな簡単ななぞなぞも解けないの知つててやつたでしょう」

「チョットナニツテルカワカラナイ」

「……いや、おかげで通れるようになったからとやかく言わないけど

ね」

でも、なんだかいたたまれない。特に横を通りすぎるときに楽しそうな横顔見た身としては加えて。それに、こんな姑息な手をとっておいて笑顔で親指をたてるってどうなのよ。

私がやればできるだけ早く退かすように手加減なしでボコボコにしていたとは思うけども、これはなんか……違う。この方法は私よりも結構鬼畜と言うかなんと言うか……。

「とりあえず、道は空いたんだしきつきさといこうぜ！」

「そうね、細かいことはいっつか」

しかし、こいつといるときは、時と場合によって細かいことはあんまり気にしなくなるのだった。何故なら先人はこう言ったからだ、『それはそれ、これはこれ。』と。

それに、どうやら気にしてられる状況でもなくなったみたい。

自分自身の勘に従って、魔理沙の服をひつつかみながら後ろへ思いつきり下がる。すると、さつきまで私たちがいた空間に幾本ものレーザーが通っていった。

『え!?!』

驚く魔理沙の服を放しつつ、声が聞こえた方に退治用の針をお返しにと投げ放つ。針は空中で『なにかに刺さったように』止まり、下に落ちていった。そのまま見ていると、さつきまでいなかったはずの青い服に緑の帽子を被った奴が必死に針を抜こうとしている姿が出てきた。

うん、確定ね。とりあえず、下に落ちていった奴が上がってこれないようにお札を投げてとどめを刺しつつ、辺りを見渡す。

「ほら、他にもいるんでしょ、出てきなさいよ。」

じゃないと、天狗に頼んで人里にあんたらの悪行をばらまいてやるわよ」

「わー、待った待った！ それだけは勘弁してくれよー!!」

威圧の意味も込めて言葉を投げ掛けると、案の定そこから辺からわらわらとさつきのと同じ格好の奴が出るわ出るわ。

全部でぎつと、二十人ほどもいる。それに先頭にいる奴は私の知り

合いじゃないの。まったく、異変の最中に邪魔しないでほしいわ。  
でも、姿を出したのなら好都合。さつそくとつちめてやる――

「おい、霊夢」

「なによ、折角出てきてくれたんだから全員張ったおすわよ」

「さつきといってることが真逆だぞ。……じゃなくて、何でこいつら  
がいるって分かったんだよ？」

「あ、そうそう、私も今不思議に思ってたんだ。何で私たちの攻撃をよ  
くれたのさ、盟友」

「処罰待ちは黙ってなさい」

「あ、はい」

全く、さつきと済ませて突破しようと思ったのに。しかし、面倒で  
も説明しないとなんだかどっちも納得してくれなさそうさ。

まったく、仕方ないわね。

「あのさ、さつきチルノと会ったじゃない」

「ああ、そして華麗にかわしたんだぜ」

「あれを華麗と言いつけるあんたの心意気って。盗人より酷いわね」

「チルノの心だけ盗んだから怪盗以上ではあるな」

「……はあ、とにかく会ったわね。その時に不思議なことがあったの  
よ」

「不思議なこと？」

「あいつの近くっていつも寒いじゃない。でも、今日はあんまり気  
にしなくなかった？」

「ああ、そう言えば……」

「春の妖精とか地獄の鳥とかがいるわけじゃないのに、寒さが緩和さ  
れてるってことは、誰か見えない奴が暖かくなるようなのでも使って  
るのかな、って思ったの。で、それができそうなのっていったら」

「まあ、コイツら河童しかいないよな。でも、コイツらの攻撃はなんで  
避けれたんだ？」

さつスキの説明だけじゃ分からないぜ」

「ん、チルノと一緒に襲ってこないで姿を隠したままなら、戦闘後の気  
が抜けた頃に来るかなって気を張ってたのよ。」

ま、結局勘に頼ったから結構ギリギリだったけど」

「というか、ここまでの予想がほとんど勘なのよね。攻撃を避けるちよつと前ぐらいに、突然思い付いたやつだし。」

「でも、そんな適当な予想でも大体は合っていたよ。よかつたわ。あの河童たちの目をまん丸く見開いた表情がその証拠ね。」

「まあ、河童って私たち人間より優れた技術を持っているくせに、なぜか人間のことが大好きっていう変な種族だから黙ってても出てきていたとは思うけど。」

「やつぱ、すごいな霊夢!」

「ハイハイそんなこと言う前に——」

「いやあ、さすがは盟友だね!」

「盟友たちのなかでも頭ひとつ飛び抜けているよ」

「見えずいたお世辞も要らないわ。それに、あんたたちもそんなおしゃべりに興じている暇はないんじゃないの、にとり」

「さつきからちよくちよく話に加わってくるこいつは河童のなかでも変わり者であり、私たちの知り合いでもある河城にとりという河童だ。変わり者って言葉はコイツらのなかじゃ、尊敬の意味も込めて使われているみたいで、事実纏め役として動くことも多い。水色の髪を二つに束ねた（外じゃあツインテールって言うんだっけ）髪型と背中に大きなリュックを背負っているのが特徴だ。それとこいつには他の河童よりも致命的な、性格的な特徴があつて……。」

「私の問いかけに、しかし彼女はニヤリと笑って首を横に振った。」

「いやいや、ここで少しでも長く会話をすれば、異変の首謀者のために時間が稼げるだろ?」

「そうすれば、私たち河童も技術革新待ったなしって訳!」

「へえ、じゃあ今倒すわね」

「しまった!?!」

「おバカが目を見開いている間に針を投げてみるが避けられた。ちえ、勘のいいやつ。」

「あつぶな!…….というか盟友、不意打ちなんて酷いじゃないか!」

「幻想郷じゃ珍しくもなんともないわ、美しければいいのよ」

「不意打ちのどこが美しいんだよ」

「少なくとも汚くはない、きれいな花火が上がるわ。」

「と言うわけで、さつきと散りなさい」

「理不尽すぎないかい!？」

「じゃあ、さつき私たちを理不尽にも不意打ちしようとしていたあんたらと同じってわけね。それって悪いことなの?」

「うぐ……聞き方がずるい」

「妖怪相手じゃこんなものよ」

悔しげな顔で睨んでくるにとりをいなしていると、魔理沙がまあまあと宥めるように入ってくる。

「そこまでにしとけよ、霊夢。」

それより出てきたってことは勝負するってことでいいんだよな?」

その言葉にこくこくと頷く河童たち。こういうのはそつがないわね、私も真似してみようかしら……って、よく考えたら社交性身に付けたところで妖怪にしか発揮されない。神社に人間がますます寄りなくなりそうとまで思い至りガツクリと肩を落とす。

「どうしたんだ、霊夢?」

「何でもないわ」

「何か悩みがあるなら私たちにいつてくれよ。盟友のためなら力を貸すよー!」

「……そう、ありがとうね」

まさに、あんたら妖怪が寄ってくるおかげで私が落ち込んで、とはどうしても言えなかった。本気で心配してそうな目をしている相手に、そんなこと言えるやつがいるならそれはよっほどの外道じゃないの。

「はあ、大丈夫よ。心配要らないわ」

「本当かい、何かあつたらいつてくれよ」

「ええ、本当に大丈夫よ……あんたら全員を落とす気が有るぐらいには」

「ひゅい!? 完璧に藪蛇だった!？」

「あつはつは、霊夢も元気になったことだしそろそろ始めようぜ!」

「ええ、殲滅してあげるわ」

「ちよつと盟友!? なんか一人物騒だから止めてほしいんだけど!!」

ふふ、おかしいなことをいうわね。そんなの私が聞く耳を持つと思う?  
?

私の前に立ちふさがる妖怪は無条件でみんな退治の対象よ。

にとりの言葉と同時に、お札を周囲にばらまき、一瞬あとに河童たちへと飛ばす。魔理沙も一度上空に上がると、流れ星のように星形の弾を次々と河童たちへと落としていく。

しかしわかっただけで、河童たちもそこそこの熟練者だ。流石に当たらずヒラヒラと全弾避けられた。

両方とも一度距離を取り仕切り直す。

「なまっではいらないみたいだな、にとり」

「勿論、盟友たちと楽しく遊べる競技だもん。鈍ってて充分に遊べな  
きや、面白くないでしょ?」

「うんうん、いい心がけだぜ」

魔理沙とにとりの軽口に同調して、周りの河童たちも一気に騒がし  
くなる。

空気が賑わっていく感覚……これぞ、異変よね。

さっきのは挨拶がわりだけど、ここからは本番だ。全力で倒させて  
もらおうわ……できるだけ時間をかけないでね。

本番の印に、にとりも懐からカードを取り出す。

「さてさて、長く遊びたいけど盟友たちにはサービスして二枚で終わ  
らせてあげるよ」

「その二枚で終わらせてやるって言いたいでしょ」

「さっさと終わらせて開発に戻りたいって目に書いてあるぜ」

「ばれたなら仕方ないね。仕方ないから、とっておきのスペルカード  
にしてあげるよー」

スペルカード。

それはこの幻想郷における弾幕ごっこという遊びの花形だ。

弾幕ごっこは、互いに弾幕という弾を飛ばしあって戦い、相手を落  
とすのを勝敗とした遊び。あくまで遊びだから殺しはしないし、それ



に遊びゆえにルール通りに戦えば普通じゃ勝てそうにない相手にも勝つことができる。恐らく私が考えた幻想郷のルールの中でも一番のできだと自負できる遊びだ。

そして、この遊びは美しさが求められる。つまり、絶対に相手が避けられない攻撃はしてはダメだし、遊びにおいてフェアな精神が必要不可欠だ。

さて、そこで先ほどのスペルカードに戻る。これこそが私の考えたこの遊びの真骨頂……なんて自分でいうと恥ずかしいが、この遊びを楽しくするための重要なファクターだ。

簡単にいってしまえば、『この遊び限定の技』。個人個人が考えた美しさの結晶がこれだ。ま、実際に見てもらえばわかると思うけど……と現実に意識を戻す。

魔理沙もあつちも膠着状態。どっちかが動けば、状況はすぐさまに急変するんだろうけど、しかしその一瞬が遠い。先に動けばそれだけ不利になるが、すぐにでも相手を倒したい、そんな思いが透けて見える。

と、ついにしびれを切らし一人が攻撃を仕掛けてきた。それに乗じ他のやつらも一斉に弾幕を張り始めた。どうやら、我慢比べはこっちの勝ちみたいね。

でも――

「ふっ」

相手の弾幕をかすり――グレイズし――ながら、考えることはひとつ。

数の差で不利なのに後の先を取ったところで意味が無いのよね。

隙を見せた河童に霊撃の札を叩き込み、バク転するように薄緑のレーザーを背中ギリギリで避ける。クルリと回る視界に大きく映る水の弾に体を反らすと、軌道上に重なるように針を放った。

「……っ!?!」

しかし、その効果を見る前に背後に気配を感じ全力で下へ。視線をあげると同士討ちする奴らが見えた。

でも、ここまでやったのに河童たちの数は最初と大して変わらな

い。その証拠に私のことを追って更に他の河童たちが戦意旺盛にも突っ込んでくる。

適当にヒラヒラと避けながら、魔理沙の方を見るとあっちもあっちでずいぶんと忙しそうだ。レーザーで空間を薙ぎ払って近付けないようにしているけど、それを避けた河童たちからの反撃も多い。今は優勢に見えるがその眼は真剣そのもの。極度の集中力で観察して相手の攻撃を捌いているんだろう。

かくいう私も余裕そうにみえるけど、徐々に体力が奪われていつている。

マズいのは分かっている。このままじゃじり貧だ、近いうちに落とされてしまう。しかし、範囲で吹き飛ばしてやろうにもそんな隙が見当たらない。

河童というやつらは我が強いから、チーム戦とか苦手だと思ったのに……どうやら、他人の作業は邪魔しないというポリシーがあるみたい。同士討ちとかは意図して誘発しないと全然ならない。スペルを放つ時間さえない。

ただ、混線になったからかにとりの方も見てるだけ全然スペルカードを使ってこない。だから、早くこの河童たちを落としてにとりをおおっと!!?

突然上から落ちてきたレーザーの束を紙一重でかわす。お返しは大量の霊撃札で。何人かの河童が落ちていくのを見ながら冷や汗をふく

危なかった……そろそろ考え事しながらは難しいかしら。

もう一度だけ、魔理沙を見るとあっちも同じ状況だ。さつきから何回も相手の弾がかすっていて、ますますまずい……って

どうしたのかしら、こっちを見つめて。何かを狙ってる——いや、そう言うことね。

魔理沙に目だけで了解と送り、一瞬後結界で周りの河童を吹き飛ばす。大したダメージはないけどこれで……。

それと同時に魔理沙もレーザーで道を空け、一気にこっちへ突っ込んできた。

当然、魔理沙の請け負っていた河童たちもこっちになだれ込んで、一気に倍に。

「どうしたの盟友たち。」

もしかしてまだスペルも使っていないのに降参かな？」

「バカいえ、そんな簡単に諦めるわけないだろ」

「残念だけど妖怪が巫女に勝てる通りなんて有りはしないわよ」

「ふうん、そこまで大口を叩くなら何か策があるんだろうね」

でも、とにとりはニヤリと笑い片手を上げる。

「この数に二人ぼっちの策が通じるとでも思うのかい。」

大人しく河童の波に飲み込まれちゃえよ!!」

上げた手をバツと下ろしたのを合図に他の河童たちが再度突っ込んでくる。さつきまでと違うのは、混ざってその数が増えているということと。

私たちが彼女たちの特性を思い出したってことだ。

増えた河童たちは元々私を相手していたやつらなのか、魔理沙の手だったのか区別はつかない。あつちも区別はなしに全員で弾を放つたり突撃したりしてくる。だけど、それでいい。

最初の弾を同時に避け、アイコンタクトを取る。

そして

「さあ、おにさんこちら、つてな」

「はい、手のなる方へ、なんてね」

魔理沙と全く逆方向に全力で飛んだ。

私は右、アイツは左に。すると河童の群れも綺麗に二分される——ハズもなく、予想通りに争い始めた。主に右にいくやつと左にいくやつで。

どんぴしゃだわ。さつきは目標がひとつ、つまり私をもしくは魔理沙を落とすつてことしか無かったけど、今度は二つに増やしたから見事に互いで邪魔しあってる。それに、人数を増やしたお陰で全体の競争心も強くなったみたいね。

たまにこちらにも飛んでくるけど、ろくに狙いもつけられてないから避けるのなんてたやすいたやすい。

少し離れていると、にとりが目を白黒させているのもよく見えるわね。

「いやあ、自分で考えた策だけどこここまで綺麗にハマるなんてな」

「私もビツクリしたわよ。まあ、一人じゃこうはいかなかったわね」

「本当だな。さて、それじゃあ今のうちに」

「ええ、一気に決めちゃいましょうか」

互いにカードをとりだし、スペルカードの準備をする。

「おい、みんなそんなことしてる場合じゃな……ひゅい!？」

ちよ、ほんとにヤバイって離れて——」

一人離れていたにとりがこつちに気づいたけど、残念ながらもう遅い。

私たちはにとりにこおつと笑いかけ、すべての力を下へと向ける。

魔理沙は充分に魔力がたまった八卦炉の砲口を。

私は山のように巨大化した陰陽玉を。

「スペル宣言」

自分のなかに溜まった力に促されるように言葉を紡ぐ。

恋符【マスタースパーク】

宝具【陰陽飛鳥井】

「吹き飛ばせ！」

「潰れなさい」

言葉が早いかそれともそれが早いか。

魔理沙の構えた八卦炉からは荒々しい虹色の光の奔流が柱のように突き進む。

私は巨大化し神々しい光を放つ陰陽玉を蹴り、その質量を隕石のように落とす。

気づいたやつは何人かいたけど意味はない。

すべてを飲み込み、私たちの弾幕はただ進んでいく。

それが収まったとき残っているものは何もなかった。  
木々もなく地面も面白いようにえぐれている。

その様を見下ろしてから、私たちは顔を見合わせて同時に声を出す。

「私は知らないから!!」

あはは、はは、ははは、ま、魔理沙の顔真っ青で面白い。

や、やましいこと、なな、ないならそんな顔しなくてもいいのにー。  
なんて、そらとぼけてみても自分の頬に面白くない汗がだらだらと  
出ているのはよくわかつている。

ならば、ここは……。

「私たちはなにも見てない」

うふふ、当事者がとぼければ真実は闇のなかに――

「ちよつと、盟友！」

なんてことしてくれたのさー!!」

「たおせええええ!!」

「上等だよつ!!」

私たちの平穩はまだ手に入らないらしい

「え、私がいくんですか？

知り合いなんじゃあ……わ、分かりました。いきますいきますから  
そんなにしがみつかないでください!

……はい、はい。大丈夫ですよ、そんなに心配しなくても行きま  
すつてば。

……私の知り合いも居るみたいですし。

お夕飯までには帰ってきますから、しっかり見守っていてください  
ね。ふふ、ありがとうございます。

では!」

異変はまだまだ収まらない。

誰かの望みが叶うまで。

## 巫女は（人間の）友達が少ない

はあ、あそこで仕留められていたら……。

今さら仕方のない後悔に頭を悩ませながら、私は迫ってくる水の弾幕を間を縫いつつお返しの際を投げつける。何をしているかと聞かれれば、にとりの弾幕を避けている最中と答えるしかない……余裕がないのも手伝って、ね。

今また私をかすった弾幕に肝を冷やしながらも、被弾を避けるため変則飛行を続ける。いや、スペルカードは効果時間が切れるまで避けても勝ちにはなるけど、時間が無いので体力を削ってさっさと落としたいのが現状だ。でも、さっきから何度も札やら針やらとお返しに叩き込んでいるけど、相手の弾の密度が高すぎてほとんどかき消されている。まるで、激流のような弾幕で時間をへるごとにそのかれつさふと視線を向ければ、魔理沙もぐるぐるとよけながら苦しそうな顔をしているのが見えた。

思えばさつき二人がかりで攻撃を当てられていなかったのが、やっぱりそもその失敗だったわね。まとめて吹っ飛ばしたあとで気が抜けていた、と言うのもあるけどアイツを少しなめていたと言うのも事実。軽めの弾幕で仕留めようとしたら、見事に避けられて即スペカ。まさに、慢心ここに極まれり、といった感じで頭を抱える他にな

い。

と、縦横無尽に私の視界を乱舞していた弾幕が突然消える。ようやく一つ目のスペカが終わったみたいね。だけど安心はできないし、勿論さっきのような慢心なんて論外。それに私が落ちたら面倒なことになりそうな予感がするしね、最後まで気を抜かないようにしないと。

「どうしたのさ、盟友たち。久しぶりだからって鈍っているのは君たちの方じゃないの?」

「よくいうぜ、一発も当てられなかった癖に」

「避けるのに必死に見えたけど?」

「それはあんたの目が節穴なだけよ。それよりにとり、もう少しきれ

いな弾幕を作りなさいよ。普通すぎて見とれないで避け続けちゃったじゃない」

「そりゃ、ごめんよ。盟友たちよりも高尚な技術を持つてるから理解できなかったみたいだねー」

「出た、河童の他人を自然に見下す癖」

「実際下じゃないか」

「さあて、ね。それはこの弾幕勝負に勝ったやつだけが分かることよ」「そりゃそうだ。なら、もう一人の巫女に取られる前にさっさと沈めてあげるよ」

もう一人の巫女？

早苗も動いているのかしら……ってよく考えたらそりゃそうか。あそこの神社元々外から来てたし、なによりこんな状況だもの。新しい物好きのあそこが動かないはずがないわよね。

しっかし大きく出たものね、にとりも。これは少しお灸を据えてやらないとダメかしらね？

だから、私達は同時に指をやつに突き付け、荒々しく凄烈に嘲笑つてやる。

「ふん、にとり一つ良いことを教えてやろうか？」

「あんたは、私たちに弾幕勝負で勝ったことは一度もないってことをね」

こいつ相手に負けるようじゃ、異変解決なんてしないっての。

しかし、私にとっては当たり前でもアッチにとっては気に入らない真実だったようで。

私達の言葉を聞くや否や、その体から妖気を噴出させゆつくりと言葉を紡ぐ。

「へえ……『人間』が私達河童よりも優れているってかい？」

そして手の中のカードをまるで風船を割るかのようには、パンツ、と消し潰す。

さらに、私達を見下すかのごとく頭上に上がっていく。

「驕るなよ、『人間』。今回ばかりは君らは私の盟友足りえない。

だから、本気でやってあげるよ！



「スperlカード宣言！」

瀑布【世界の終わりの幻想大瀑布】

始めはポツポツと。だが次の瞬間それは急激に数と大きさを増して、あつという間に私の視界を埋め尽くす。

例えるなら、それは世界のすべての水をかき集めた滝——いや名前通り瀑布か。それはにとりを取り囲み、まるで水でできた要塞のように円上に、隙間なく、際限なく量と密度の暴威を築き上げる。遠くから見れば、いつそ壮大であるとも圧倒的であるとも言えるだろう。

だが——

「ぶつけられてるこっちらからしたら冗談じゃないわよっ」

弾と弾の間の1メートルにも満たないあいだを、必死に潜り抜けながら叫ぶ。

ちっ、やっぱり見えないわね。これじゃ、こっちの攻撃を当てるのもままならないわ。さっきからアミレットを飛ばしてるのに、ほんどがそのまま水に飲み込まれてるし。

「おい霊夢、どうするんだ？ お前が焚き付けたせいだぜ」

責任転嫁甚だしい言葉に振り向くと、いつの間にか魔理沙も近い場所まで来ていた。だからなについて話でもあるけど、こいつの観察眼も借りれば何か分かりそうね。でも

「なに私にだけ押し付けてんのよ。あんたも言ってたでしょ！」

人に責任を丸投げしないでよ、魔法使いってそんなものだろうけど。

それにこいつを落とすよりも先にやらなきゃいけないことがある。会話をするには少しばかり空が忙しないけど、贅沢は言ってられない。近くて遠い位置にお互いを置き、蜂のようにひゅんひゅんと飛び回りながら私達は叫びあう。

「そういうえば、——つぶ、魔理沙」

「なんだ？」

「なにか分かった？」

「えらく曖昧な質問だな。でも少しな、らっ！」

言葉と一緒に大きく宙返りしたかと思えば次の瞬間私のすぐそばにいた。

目を丸くする私の肩をパシッと叩き、

「思いついたから、ちよつと離れてくれ」

ええい、肝心なところで人任せなのどうにかならないの、こいつは！

しかし、私には文句を言うどころか一刻の猶予すらないのだった。目の前に迫る弾幕に冷や汗を垂らし、術を起動する。あわや後数センチ——という危険なところでなんとかギリギリそれを発動させる。

——【夢想亜空穴】——

次の瞬間、目の前に見ていた弾幕は見えなくなり、代わりに壁のような水の弾幕が姿を現した。

「いよつ、さすが次期スキマ妖怪候補」

「今度その笑えもしない冗談を言ったら、一緒に甘味処に行つてやらないから」

「ごめんなさい」

割と本気で噂されてるから本当にやめて。というか、誰よこんな悪質なデマを流したの！

一番可能性が高いのは張本人のスキマ妖怪だけど、何故か発祥は妖怪サイドからじゃなくて人里からっぽいのが腑に落ちない。よくも悪くも目立つから、人里で動いたんなら、何かしらの痕跡が残つてそうなのになにもないし。でも、人里で、このスペカを見てスキマを想像しそうなやつつて……ああ。

いた。しかも、おあつらえ向きに要らない想像をしそうな友人までもってるやつが。後でお仕置き決定ね、あいつら。

真犯人も分かったし、あとはこいつの話聞いてさっさとあの河童を倒しちやいませうか。

「で、結局なにを思い付いたの」

「ん？ ああ、そうだった。そういう話だったっけ」

そう言つと、私の肩においていた手を離し、人差し指を指す。

「まずアレ。アレ見えるか」

指した方向を見てみるが、その方向にあるのは落ちてくる水の弾幕だけだ。正確に言えば、落ち始める位置だけど……それが何なのかしら。あ、もしかして上から突っ込んでみようって話？ 確かに上からの弾幕なら、横方向に行くより、縦でいく方が楽に決まっているわよね。

「違う違う、説明に必要なんだよ。さて、ここからじゃ落ちてくるところしか分からないだろう。でも実はあれ、予想じゃ上の方の中心から落下地点までは横方向に流れているぜ」

「なんで、そうだって言い切れるのよ」

「スペカの名前聞かなかったのか？ ありや、天動説由来だぜ。幻想郷だからって好き勝手やりやがって」

「ちよつと、説明放棄して勝手に怒らないでくれない？」

「そもそも、こっちはそんな言葉はじめて聞くのよ」

「ああ、すまんすまん。でも、詳しく説明している時間もなさそうだし」

魔理沙の視線を追うと、今まさに壁がこちらへと近づいてくる。とりあえず逃げながらも説明してもらおう。

そう考えて、追いたてられるようにそこを離れた。魔理沙がこちらも見ずに言葉が続ける。

「ええと、天動説は地球じゃなくて太陽やら星やらが動くから空の様が変わるって考えた。でもって、大昔はそれに加えて地球が平べったい板だ、ってのも付け加えていたんだ」

「へえ、違つたんだ。で？」

「……。そういう考えの場合、海の水とかはどうなると思う？」

「確か、それって世界を覆う大きな水溜まりだっけ？」

「んーと、下に落ちる……？」

「そうだ、なんのしきりもない板の上の水なんて端までいきや落ちるのは当たり前だ」

「つまり、それがアレってことね」

背後をチラ見すると、まだぴったりと後ろについてきていた。物凄い勢いで通りすぎていく下の景色と、びゅうびゅうと吹き付けてくる

風がどれ程の速度か教えてくれる。知りたくはないけど。もし止まったら、大根おろしみたいになりそうで怖い。

あれ？でもその考えだったら……

「真ん中は水が落ちてないんじゃないの？」

それはつまり表層の厳しさを突破できれば、後は楽になるということ。実際スペカが発動した直後、弾幕はにとりを囲むように——発動者に当たらないように降っていた。それは、魔理沙も領く。

「ああ、そうだけ。水の及ばない陸地のところなら水は落ちてこない」

だけど、私たちは知っている。この幻想郷にいるやつがそんなに甘いはずがないってことを。

「でも、安全じゃない」

魔理沙がそう言うのと、背後からの押し寄せるような圧が更に強くなった。まるで、大きな生き物が蠢動し始めたかのように。

「そろそろくるぞ」

その忠告が早かったか。

ぞわり。

と勘が危険を知らせる。

「……っ!？」

咄嗟に上へ。すると薙ぎ払うかのように、レーザーの束が過ぎていった。

しかし、安心している暇はない。チラリと後ろを振り向くと、水の壁から次々とレーザーが湧き出るのが見えた。

それは、一個の巨大な生物。光の届かない深い水の中で、巨大な何か蠢くよう。

時に尾びれを薙ぎ——横から埋めるように迫る弾幕の間を縫い、

時にその体の動きで水中をかき回し——唐突にバラけて飛んでくる水の弾を結界で弾き、

時にその大口で飲み込もうとする——上下から押し寄せるレー

ザーの束をその紙一重の隙間に滑り込んで避ける。

私たちにとつてはこれは戦闘だが、その生き物にとつてはまるでうるさいやつを追い払うぐらいの行動でしかないだろう。

彼女は知っている。

「昔の人が考えたのはその平べったい板だけじゃない」

私と同じように、だが分析をしながら、そして言葉を継ぐ。

「バハムート、って言うんだ。要は神話と同じだ。水が落ちていった先の広大なる海にいる、板みたいな世界を支える奴の一体として信じられてきた」

「神話？ それにその名前……何であいつがそんなこと知ってるのよ」

飛んできた水塊に身を反らす。追加で来たのは今の隙で作った結界を使って消す。

「やっぱり避けるのも厳しくなってる……。弾幕を弾く結界も後何度使えるかしらね。」

「あんたはあそこに入ったり出たりしてるから分かるわ。でも、あいつが外の、それも日本でもない国の廃れた神話を知っているわけじゃない」

依然、弾幕は激しさを増すばかり。しかし、そこは私にとつては聞き逃せない。そこらの情報は私たちが管理しているはずだから。唯一、紅魔館の大図書館はその検閲から逃れているが、それは持ち主やその利用者がその情報を悪用、拡散しないと分かっているからだ。

「本当にそうか？ それとも、今何が起こってるか忘れたのか？」

「はあ？ 何がって、異変で外のものが大量に……ってそう言うことね」

「たまたまそれが載った媒体を手に入れたんだらうな」

「頭痛の種が増えたわ……ますますさっさと終わらせないと」

つまり、これから運悪く他のやつに捕まったら、そいつも強くなってるかもってことでしょうか？ 今回のやつ本当に面倒くさいわね。

足に靈力を込め、弾幕のひとつを蹴ってそらす。そろそろ結界も間に合わなくなってきたわね。

さて。

それで？

「ここまでわざわざ弾幕避けに撤して話をしたからには、何か対抗策が有るのよね？」

「もちろん！　そもそも、外の知識が入っただけじゃあいつhが強くなるのはあり得ない。」

そして、この弾幕のからくりも大体予想がついた。

反撃の時間だぜ!!」

そうこなくっちゃ！

私が期待の目で見ると、魔理沙も楽しそうに笑い右手を前に突き出す。

「まずはあの辺りを吹き飛ばすぞ、合わせろ霊夢！」

指したのは、にとりが弾幕を展開し始めた位置——よりも下のレーザーがわき出ている部分。

「分かったわー！」

その言葉で焦ったのか。突然大量の弾幕が落ちてくる。しかし、残念だが狙いが甘すぎる。

私たちはひらひらと弾幕を避け、スペルカードを取りだす。

「スペルカード宣言」

私たちの手の中でカードが消え、その力の形状を現出させた。

霊符【夢想封印・集】

恋符【ノンディレクショナルレーザー】

現れたのは集束する霊弾と貫けないものなどない光。

先ずはレーザーが水の壁に激突し、貫く。そしてその穴を広げるように、霊弾が押し通る。

その穴から見えた中には誰もいなかった——始めは。

レーザーが通り抜け、その後の集束した霊弾が爆発を起こす。

すると、次々と相手のレーザーがかききえ、代わりにさつき落ちていったはずのカップ達が姿を現す。

「なるほどそう言うことね」

カッパが落ちていくのと比例するように、弾幕は薄くなっていく。つまりは、それしか答えがなかったみたい。

強くなった、じゃなくて仲間を集めて強く見せていたってこと。確かにルールには複数人でやってはいけないと明記していないし、似たようなことをしているやつらならいる。でも、ここまで堂々とやられるなんて……しかも気づかないなんてね、まったく私の勘も鈍ったのかしら。

「タネが分かったか？」

「ええ、完璧にね。今回はあんたのお手柄よ」

「あはは、私一人じゃ切り抜けられなかったぜ」

「はいはい。まだ終わってないんだからあんまし気を抜かないでよね」

そういつて上を見る。底には未だに水の壁が塞がっていた。

やっぱり、にとりは残ったわね。下の方にいるとは思ってなかったけど、いたら一気に終わってたのに。

「で、あいつを倒した方が手柄ってことでもいいのか？」

うずうずと八卦炉を手の中で転がしている魔理沙に、私は答える。

「ええ」

術を発動させてから。

【夢想亜空穴】

「出来たらね」

目の前に現れるのは水の要塞の、中心部。見下ろした渦の真ん中を睨み、早口でスペルの宣言をする。

「は？ え……ズルいつ!？」

下でなんかのんびりしているやつがいるわね。まあ、関係ないけど。一番手柄をあげた方が人里でスイーツおごる約束はしてるけど、それとは関係ないだろうし。

魔理沙の嘆きは無視して、投げたカードを蹴り碎く。

「宣言」

宝具【陰陽鬼神玉】

それと同時に背後に特大の陰陽玉が出現する。

「夢は潰えなさい」

蹴った勢いに乗り、回転。そして落ちてきたそれにあわせ、ちょうど頭があった位置から蹴り落とす。

水の要塞なんて、砲撃さえなけりやなんのその。

巨大質量が夢の砦を潰していく様に背を向け、私は魔理沙のところまで降りていった。

「おい、霊夢」

「何かしら？」

「何かしら、じゃない！ 私の手柄を総取りしやがって！」

「私はただ早く異変を解決したかっただけよ」

「いや、違うね。新作のデザートおごらせようとしてるだろ！」

「なんのことかしら」

「とぼけたな」

「なに、あんたも手柄ほしいの？ 異変解決してみんなにちやほやさ  
れたいの？ そうだったのねー」

「いや、それは、その……………うん」

「あ、うん……………なんかごめんなさい」

「そうだけ、反省しろよこの強欲巫女」

「なあ!? 言うじゃない、上等よこのエセ魔法使い！」

「上等よ(だぜ)!!」

にとりが起きてくるまで、私たちは誰もいない空でギャーギャーと騒ぎ続けるのだった。……………時間もきにせずに。

———? 少女祈祷中 / ^———

二分钟前

「あれ、あんなところで弾幕ごっこ? 確か、あのあたりは河童の里に近かったはず……………。とりあえず見に行ってみますか」

———? 少女祈祷中 / ^———

「何でもやれそうな気になっていたからさ」



にとりに話を聞いてみると、そんな言葉が返ってきた。

そもそも、幻想郷の河童は進んで人間を襲ったりしない。それは、幾度となくこのカップたちと遊んであげた私だって例外じゃない。まあ、遊んだって言うのは比喻で、変なことをしそうなときに叩きのめしたってだけなんだけど。でも、そんなことをしていてもこいつらは私から仕掛ける前に襲ってきたりしなかった。

でも、なぜか今日は違った。いくら研究のためとはいえ、人間を排除しようとするなんてコイツららしくない。

そう思って、何があつたのか聞いてみたらさっきの言葉に繋がったのだ。

さっきまでの調子はなくどこことなくシユンとしてるツイッターに、続けて話しかけてみる。

「何でそうなったのよ？」

「分かんないけど……昨日、人里いったときに盟友たちがピリピリしていたからその煽りを受けたのかも」

「ああ、そう言えば……」

確かに、人里にいた人間と同じような状態かもしれないわね。うーん、やっぱり異変の首謀者に直接聞くしかないわね。このままじゃ全部わからずじまいだし。ただ、これにかかるのが人間だけじゃないって分かっただけよしとしましょうか。

一区切りつけ、魔理沙にアイコンタクトを送る。魔理沙は頷き、にとりの頭を撫でてにっかりと笑ってこういった。

「ありがとな、にとり！」

お前のお陰で少しは謎に近づけたよ。

今度もまた弾幕ごっこしようぜ」

「いやいや、盟友の役に立てたのなら何よりだよ。

あ、でも弾幕ごっこは絶対しようね、約束だよ盟友！」

もうそろそろいくよ、って伝えただけなんだけど。何でそんなに雰囲気出してるのこいつら。

んーでも、ストレスとか溜まってさっきと同じ状態にならないならいいか。

「さ、霊夢、いこうぜ」

「霊夢も気を付けなよ！」

「はいはい、ありがとう」

「それじゃ、首謀者のところまで一直線にいくぜ！」

「……そう言えば、私たちってどれくらいここにいたんだっけ」

「あ」

冷や汗が止まらない。主に面倒そうなイベントの開始を予感して。面倒な事態を避けるためにと時間と戦いながらいこうと思ったのに、もうすでに終わりの気がしてきたわ。

目を見合わせた私たちが、持てる全力でソコから飛び去ろうとした瞬間。

すべてが遅かったことに気づいた。

目の前に飛んできたそいつは緑の髪をしていた。

そいつは蛙と蛇の髪飾りを付けていた。

そいつは巫女装束をきた女子高生のようなやつだった。

つまること、そいつとは。

「あー、霊夢さん魔理沙さん！」

こんなところでいったい何を……あ、神様たちの邪魔ですね！

そんなことは、この太陽と愛と悲しみの巫女『東風谷早苗』RXがゆゆる”さ”ん……って、何でそんな面倒そうな顔してるんですか!？」

「……………一番面倒なのが来た」

「口に出して言わないでくださいよっ！」

天を仰げば私の悩みなど小さく……ならないかなあ……？

叫ぶ現人神を前にそつと眩くのだった。

やっぱり、人外の知り合いの方が多いいのはダメじゃない？ 巫女として。

明日の自分の背中を追い続けていた。でも、それは本当に正しいの？

気持ちは追い付かず、焦るような感情と裏腹になる。

それでも、私は前に進んだ。いや、進んでいると信じ続けた。

だって、今なら昔と違って、願ったら奇跡ですら叶えられるんだから。

昔よりも、多くのことができるはず。昔のような失敗はしないはず。

捨てたものを取り戻すことも、私にはできやしないのにそんなことを考えていた。

それだけを信じて、その時は——今はただ前だけを向いて。

一歩でもいい。私に、自分が捨てたものに執着しないような、前だけを向いて歩けるような強さを。

かぜはふりのおしごと!!

東風谷早苗という少女について話そう。

さて、この少女はどんな人物か。勢い込んで話そうと言ったが、彼女を語ることは少々難しい。何故なら彼女は人であって人ではなく、読みやすいようできて全く読めない人物なのだから。とはいえ、外見ならパツと出てくる。なんせ、それこそ親の顔より見ていると言うのが比喩でなくそのまま使えるほど、顔を合わせているのだから。

髪は世にも珍しい明るい緑色。虹彩も同様だ。美少女、とそう堂々評せるぐらいにその容姿は整っており、大人っぽさよりも子供っぽさの方が多く比率を占めるその顔は、笑顔になれば周りの人間も一緒に笑顔にさせる。性格はそんな容姿に合わせたように、天真爛漫に生を謳歌する中で一本自分の芯を持っているような、そんな『強い』ものだ。身長はそこそこ高い。私が小さいというのも有るのだろうけど、それを差し置いてもいいとした高校二年生の背を頭一個半位の差で引き離すとなると、大きいという評価は間違っていない。どことは言わないところも、私より圧倒的に大きい。それでいて私より身長の方少し太いだけで、対して細さが変わらない、って言うのはズルいのではないだろうか。

さて、だがしかし。いくら容姿や外面的な性格を説明しようが彼女の本質的な部分を語らねば、彼女を知ってもらうことは不可能に近い。

まずは基本にして最重要なこととして、彼女が現人神であることは知っているだろうか。人でありながら生きながらにして神へと——信仰する対象へと変化したのが彼女だ。少なくとも、私が最初に見たときはそんな者でなかったのは確かだ。そして私の知る限り、世界に名高いキリストでもそうはなれなかった。彼は元々神の子であったから信仰対象——神へと至れたのであって、ただの人間であれば聖人としては数えられただろうがそれだけだっただろう。普通の人間は神になれない。なれるのは元々普通でないか、それとも普通では無くなったかのどちらかだ。かの天神も同じ方法で神へと至った。

続いて、同じように基本として。彼女は風祝である——と言っても名前が違うだけで、やることは巫女と大して変わらない。神様のお世話をして神事の時はそのお手伝いをするだけ、つまり私と同じである。神であつてまた巫女でもあるのだ。まあ巫女の神もいるけど、巫女と言うのは本来その上位の存在を自分と同じ舞台に一時引きずり下ろす職でもある。神の力を人間でも扱えるように調整する、それが役目だ。そう、人間はそのままでは神に至れないが、神に近づきその力を借りることはできるのだ。

この二つの要素を持つから彼女は人であり、また人でない。

しかし、そんな状態でありながら彼女は何も変わらない。私が前に見たときも、今も。変わる前も、後も。彼女は同じ笑顔を浮かべるのだ。そして実に人間くさい理由で、普通の人間にない行動力を発揮し、人と神の境目などなく全てを助けてしまう。

私は誰からの手も遮り、自らに納得し、閉じ籠っているというのに。それすらも彼女には通じない。人は両方から手を伸ばさないと繋がれないと聞くが、それは彼女のような例外には通じない。

『貴女の分の手の距離が足りないなら、私とその分近づいてそれを埋めればいいでしょ?』

なんて、いつかあの子がいつてた言葉だ。そして、それは偽りじやなくあの子は私の壁さえ乗り越え、私にその手を触れさせた。あの人以外で初めてだったんだ、私に直接触れてくれたのは。ソコからはじめてのことばかりだった。でも、貴女といれば何も怖くないどころか全てが楽しくて。私の下らない愚痴に、苦笑いしながらもちやんと聞いてくれたあの子の顔が私のお気に入りでもあった。

思えばあの子は私の恩人と言っても間違いじゃない。あのまま誰とも触れあえなければ、私はその薄暗い壁の中でただ一人ズブズブと孤独の沼に取り込まれていただろう——溺れているのにも気づかず。そんな中、手を払い除けようとする私を全力で掴んで、そこから日の当たるところに引っ張り出してくれたあなたは、私のヒーローだ。

だから、今度は私の番。私が貴女にこの身を砕くときだ。例え、あ

の時のあなたが他意を持っていたとしても、私にとってそれは真実だった。だから、私はあなたを救う。

再会は思わぬ偶然の産物だけど、そんなものは関係ない。

そして、全部終わったその時には、また二人で――。

それで、と会話を始めるにはいささか以上にぶっきらぼうに私は始める。

「なんで、あんたがここにいるのよ」

面倒そうに目を向けると、当人は対抗するようにむんつと胸を張る。

「なんで、って異変だからですよ。

異変あるところに巫女あり！ おかしな事でないでしょう？」

「そうだな、お前が巫女でないってことを置いておけばな」

「なーに言ってるんですか、魔理沙さんたちも充分人間離れしてる癖に」

「そう言うことじゃないし、私はデオキシリボ核酸的には人間よ。そのとあんたは知らないけどね」

「人間離れしてる自覚はあったんだな。私はそんな自覚はないからまだまだ人間だぜ」

よく言うわ、普通の人間は魔法を使わないって気づかないのかしら。

そこをいくと、私はちよつと空を飛べるだけだし充分人間よね。

「それに私は霊夢さんたちのように、ただなんとなくじゃなくて家の神様二人のご命令で来てますから」

「失礼ね、私のは確信を持った勘よ？」

「あつちに異変の首謀者がいそうな気配がする！」

「ダメだ、こりや……」。

ええい、神託を受けた私に楯突くとは不届き千万！ いぎ、神罰執

行です!!」

理不尽じゃないかしら。

首を捻りたい気持ちを押し殺し、飛来する弾幕を右に左にと避ける。

まったくあの寺の破戒僧と言い、霊廟の聖人ゾンビといい、なんで神職をかじったやつはどいつもこいつも変なのしかないのよ。……なんだか、ブーメランが見えたけどきつと気のせいよね？

「というか、お前らにしては珍しくこの手の物の食い付かないんだな？」

そう言えばそうね。こいつの神社って住んでるのが全員新しい物好きだったはずだけど、どうしたのかしら。

すると、早苗は困ったように眉根を寄せた。

「うんと、神様たちは知ってるみたいなんですよね、犯人のこと」

『ええ!!』

「それで、その人？とは知り合いというか、あれってなんか上司みたい……？」

まってまって、情報量が多すぎる。

え、なにそのつまりどういうこと？

私の心とは対象にいつの間にか緑の雨あられは止んでいた。彼女の頭には天使の輪がかかっていた。

でも、その輪は今はずこしばかり横に傾いている。何かを思い返すように。

「うーん、あともう少しで何かひらめきそうなんです。上司、それも面倒だけど圧倒的に力がある……まるで、にとりさんの鬼に対する反応みたいなの……」

よく考えたら、物に手は出さないのに足止めはするって言うのも変です」

ひゅいっ!!

下の方で何か聞こえたけど、気のせいね。

というか、結構重要そうなことをポロポロ出しちゃってるけど良いのかしら？

私たちそつちのけで考え始めた彼女を観察していると、推論のまとめなのか情報がだばーと溢れてくる。私たちが居るつてのを忘れてるんじゃないでしょうね。

あれ、そう言えばさつきついでになんかいつてなかったけ。ええと、私たちの、足止め……？

その事に気づいた瞬間、私の心は決まった。

ええ、そうよね。よく考えたら別に難しいことじゃなかったわね。邪魔するやつはみんななぎ倒せば、最後に残ったのが首謀者になるんだから……。

ぶつぶつと考え込んでる早苗に視線を固定し、右手に札を備える。

「魔理沙」

「やる気満々じゃないか、どうした？」

「あいつは、わたしたちの行く手を阻むわ。だから排除するわよ」

魔理沙の返答はその場に置いて、一息に早苗の目の前へ。

ようやく私に気づいたらしいけどそれはもう遅い。目を見開く彼女めがけ、霊撃符を叩きつけた。

瞬間、込めた霊力が爆発する。

私は爆風に逆らわず、途中でぐるりと回転して元の位置へ。

「初手から容赦無いな……」

呆れたように魔理沙が言うけど、このぐらいじゃないと彼女にダメージはない。それに、これで仕留めきれないのは二人とも分かっている。

ひゆうんっ　　ひうん　　どらららららっ

煙の中から大量の弾幕。お米のような弾を左右に避けると、煙が内側から散らされるのが見えた。その正体は勿論早苗なのだけど、彼女は頬を膨らませていた。しかも結構怒ってるみたい……そうか、あれが激おこの状態つてやつね。

「もーゆるしませんからねっ！」

人が考えてるときに攻撃するのはマナー違反だってその身に刻んであげますよ!!」

のんきなことを考えている場合じゃ無かった。



わたしたちの前でスペルカードを取り出し、即座に宣言。  
「古来より受け継がれし秘技、とくと見せてあげましょう！」

### 秘術【グレイソーマタージ】

カードから飛び出た霊力は、彼女の持つお祓い棒に収束。それを使い、彼女は素早く五芒星を書き上げる。早苗の身長に迫る直径のそれは、魔方陣としてそこに顕現した。それは光を放つ、彼女の感情に感応するように、激しく。

私が警戒した次の瞬間、光は弾けた。

同じ大きさの星が幾つも青い空に飛び出す。それは、それをもって新たな魔方陣描くような規則性と精密な制御をもって、私たちの退路を塞いでいく。

「くっ……い！」

最初から得意なやつを選ぶなんて、正しくて荒々しいわね！

弾幕の密度や数はそうでもない。だけど、一つ一つが大きいから油断していると避け損ねることになるだろう。

星が描き続ける、星の魔方陣。大空をキャンバスに映されるそれは美しい。

観覧者ならば、それに感嘆のため息を漏らすだろう。でも、おあいにくさま。

「邪魔するなら叩き落とす。邪魔になるなら叩きつぶすするり。」

貴女の弾幕は今『覚えた』。

「フオールオアダウンよ。落ちなさい」

規則性の歯車をすり抜け、また目の前に。

「え!?!」

即座にそれを出せるのはたいした技術……だけど、届かないわ。

早苗が撃った五芒星に反転。タイミングは一瞬、だけど狙えないほどシビアでもない。

当たる直前、一分前へ。空いた隙間を活用し、背中に迫るそれを

背面跳びの要領で潜らせる。

逆転した視界には早苗の青ざめた顔が映り――

「にやあああー!!」

強化したお札によって吹っ飛んでいった。

ふう、良い仕事した!

努力の証を拭っていると、隣に魔理沙が来た。

「あのな、もうちよつと付き合ってやれば良いのにさ」

「いやいや、時間が無いのよ? 悠長なこといつてる暇があるなら、もつと面倒なことになる前に叩いておかないと」

「理屈は分かるけど、すごいなずきたくないぜ……。だから、人間より妖怪の方が知り合いが多いんじゃないか?」

「余計なお節介よ!

それにほら、まだ終わりじゃないみたいよ?」

ピツと指でさすとちようど早苗が上がってくるところだった。さつきみたいにぶんむくれてるけど、なんというか本気度が違う。ま、私相手に気を抜いてたんだから、それでも足りないぐらいだけど。それに、いつもだったらもう――

「ええい、おのれおのれおのれおのれい!!」

あなたたち相手に本気を出さなきゃいけないとは、ですよ!

だけど、これでおしまいにしてあげます。この私の新作スペルでっ」

やつぱり、ね。新作だとかなんかで誤魔化してるけど……。

勘にしたがった予想に確信を持つ。魔理沙も多分今から確認かしらね。

「おい、早苗!」

「どうかしましたか、魔理沙さん。」

あ、人類最古の金色の英雄に似てるなって? いやあ、よく言われるんですよ、声真似は得意――」

「ん、誰のことだ?

まあ、知らないことは後回しにして」

「そー言えば、幻想郷ですもんねー。そりやつたわりませんかー……」

「一つ聞きたいんですけど、お前さ」

お前んとこの神様の力、使わないのか？」

そう、それが一つ目の疑問と予想。それが今回の異変の首謀者に関わってくるはず。

それにあんなに目をうるちよろさせてたら、何かあるって言ってるのと同じだわ。

「ふ、ふん、魔理沙さんたちには関係ありません！」

別にお二人の力を使うまでもない、と思っただけですよ。なんてったって、日頃多忙なお二方なのです、疲れているときにお力を貸してもらうなどとてもできません」

違う。

確信に近い直感で、私は否定する。

力は『使わない』んじゃないで、『使えない』のだ。理由は分からないけど、この異変が関わっている。そして、それは多分消極的理由のほう。使った場合に都合が悪くなる可能性があるから、『使えない』のだ。早苗の言葉から考えたら、そしてその行動から考えるなら……あの二柱より位が高い……？

「とにかくっ」

突然の大声に思考が切られた。

見れば、件の彼女がこちらを睨み付けてる……けど、顔だちがもともとふんわりしてるからあんまり怖くないのよね。なんというか、子犬がじゃれついてきてるみたいでほっこりする。

そんな私の感情が伝わった訳じゃないだろうけど、赤い感情を表に出して彼女は再び霊力を集中させていく。

「お二方の精神安定のためにも、ここは通すわけにはいきません！」

あらたな聖人の力とくと味わって、散ってください!!」

彼女がふところより出でましたるは、スペルカード。

こいつと遊ぶことはそこそこあるから、彼女のスペルは大体覚えてる……なんて、気を緩めない方が良くいわね。

視界に映る彼女のカードには一切見覚えがない。さつきいつてたのってこれだったのね。しかもあのカード、なんだか変な感じがする。私たちの世界に入れておいてはいけないどこか異質な……。

「スペルカード宣言っ！」

あー、考えてる場合じゃないわね。まずはこいつを落としてから考えましょうか！

上空に向かってカードを飛ばし、早苗はその引き金を引く。その瞬間、暴風のように変じた霊力が空を清浄に荒らす。

思わず細めた視界で彼女はそっと口を動かす。

神人【甦る心像】

どくんっ。

まるで空気が脈打ったかのよう。ビリビリと震え始めた空気にもう一度、

どくんっ  
と響く。

すると、あれだけ荒れ狂っていた霊力が一つに収束していった。そこにできたのは……

「なんだ、ありや……！」

魔理沙のほうけたような声が響くが、それは私も同じだ。

早苗の頭上、力が集まり顕現したのは巨大な十字架。光の柱、という表現がぴたり当てはまりそうなそれは、それだけでこの空間を支配せんと周囲を圧していた。それほどまでのスケールの代物

でも、とそこで正気に戻る。戻らなきゃならない。だってまだ、攻撃は始まってすらいない。それを見計らったかのように、今度こそその威容が動き出す。

撒き散らされるのは、大量の光。弾状のそれは全方位へ無差別に撒かれ続ける。でも、この程度ならまだ序の口。そして勘が警鐘を鳴らす、これで終わりのはずがない、と。それを示すように光の弾は宇宙で留まった。

「ん、なんだこれ。まさかこれだけじゃないとは思うけど、準備としても疎らじゃないか……?」

怪しげにそれを見回す魔理沙。私もそれに同調しようとして——  
「魔理沙っ!!」

ばつとその場から飛び退く。来たのは一条の光。

「どうやら、今度はレーザーの乱舞かしらね? と暢気に思った瞬間。」

伸びてきたレーザーが、光の弾に当たり——弾けた。

まず光の柱が真っ直ぐに伸び上がり、ソコから光散らすように大量の弾幕が飛び出す。

「っ!?!」

咄嗟に隙間を見つけ、体を滑り込ませた。通りすぎていった光の弾幕と、目の前の光の柱に私は目を剥くしかなかった。認識が追い付かない。

でも、立ち止まってたら解決するほど現実には甘くない。

「おい——来るぞ」

静かに恐れを秘めたその声に振り向く。

覇する十字架から飛び出してくる光の嵐が私を埋めた。今度は順番なんて守ってくれやしない。光の弾も伸びてくる光もいつしよくだ。ただ。

「さあ、今度こそジ・エンド。早く私に席を譲ってくださいな、霊夢さん!」

聖人は微笑む。信仰を疑わぬ信徒のように、勝利を確信して。

「けどね、早苗。主人公つてものはそうそう負けないようにできてんのよ。私みたいに強いのは特にね!」

「嫌よ、あんたに譲ったら私の席がなくなるじゃない。それに椅子とりは座ってない方はさっさと避けるもんよ? 分かったら、そこから落ちなさい!」

視界を光で埋め、私は明るい地獄へ躍り出る。

「やれやれ、結局いつもお前の方が前のめりじゃないか」

乱舞する聖光を避けていると、私の横に光をかきけし力のある虹が

かかる。

即興の橋をわたるは、星と月見の魔女（見習い）。

「そこで提案だぜ、紅と白に黒を混ぜて光を濁してみるってのは？」  
「大変結構な」提案ですわ。眩しすぎる照明は落として自然の光でダンスと洒落混みましょ？」

お互いに軽口を叩きあい、すつとその場から後ろへずれる。一瞬あと、光が突き刺さるが残念ながら私たちはもうそこにいない。私たちはちらつと早苗の方を向き、笑う。鼻を鳴らして、もしくは月のように。

そして、それが開戦の合図にもなった。

私たちが前に進むのと同時に、弾幕の密度もさつきより増す。まるで世界中に信仰を届けるように光はまかれつづけ、私たちの軌跡までも潰していく。

それでも私は飛び続ける。障害物の光を上にも下に、下にも左にも避けながら風を切って飛ぶ。

しかし、そのなかでも次弾は容赦なく降り注いで私を押し潰そうとする。蠟燭に光を灯すように、レーザーが光の柱を乱立させていく。ソコから溢れてくる光によって、私は遂にその場に縫い付けられる。止まっている弾に注意しつつ、高速の弾を避けるなんて、危険すぎてやってられない。ともすれば、私もその光に飲み込まれてしまうだろう……私一人なら。

光に眩みそうでも、その場にとどまってしまった私の横をもっと強い輝きを通り抜けた。それは流星。金色の髪を尾のようになびかせ、彼女は宙を駆る。圧倒的な速さで弾を置いていき、あるいは軽妙な箒さばきで、あるいは曲芸のように箒から跳んで。空をキャンバスに、その輝かしい光の粒子を使って空に絵を描いていく。途中の障害など全て避け空へ空へと描き上げていく。

あんだだって充分にノリノリじゃないの、落としたがりって怖い怖い。でも、おかげで気合いは入ったわ。

ギラギラと光る檻の中から私は眩き、その大元をキツと目に焼き付ける。

私を縛ることなんて、誰にもできやしない。だから、さあ今度こそ反撃してみましようか。

ふうっと深く息を吐き出し、目を静かに閉じる。

ぼんやりと開いた視界は奇妙に色が薄い世界を映した。眠る前のように安いでいるのに、意識は研ぎ澄まされているのを感じる。そうしてその感覚に身を委ね、外へと踏み入れる。

一歩踏み出し覆う光を無いように、二歩踏み出し刺す光を横目に、三歩踏み出し溢る光をやり過ぎす。

ゆつくりとした歩みだったかもしれない。しかし、私に触れた光は一片もなかった。ゆらゆらと水の上を歩くように私は進む。それは見ている方からすれば一種異様な光景だったに違いない。

そこに弾幕などないように、私は歩む。避ける、避ける。

横から弾ける弾幕のその空隙に立ち。

前から風のように流れくる弾幕の間をすり抜け。

檻と差し込む光は私の影となる。

ただ、避ける、歩む。

気づけば早苗はもうあと10もしない距離にいた。

ただ、進むと言うことは彼女に近づくとということであって、すなわち弾幕の密度が更に増し、避けにくくなるということでもある。

早苗の位置まで近くなったことで、私の進む早さもグツと落ちる。横殴りに降る光をエアポケットを探すことでやり過ぎし——なんてことも次々と吹き荒れる光のなかじゃ無理だ。諦めて、私は極限の集中状態を解き自らの世界に戻る。弾ける弾幕も完全に壁と化している、強硬で突き抜けるのは無理だろう。ただし、それは私自身の話であって弾幕はその限りじゃない。

さあ、ここまで貯めた私の怒り、存分に味わいなさい？

世界が色を取り戻したその瞬間。カツと目を見開き、懐から針を取り出す。

そして

ダラカカカカカカカカッ。

爆風のように弾ける光のなか、一直線に最速で針を放出する。

連なったそれは硬度を持ったレーザー。

光の壁にあるわずかな隙間から敵を刺し穿つ、私の自慢の一品。どうぞ、骨に刺さるほどご堪能あれ、よ。

でもまあ、簡単には当たってくれないわよねえ……。

視線の先には、針を障壁で防ぐ早苗の姿。流星に防ぐので手一杯では有るけど、弾幕は止まってないから私も針を連射するぐらいしか出来ない。攻め手に欠ける私に勝ったと思ったのか早苗が笑う。

だけどもね、勝負は最後まで気を抜いちゃいけないのよ。あと、一人にだけ集中するのもダメよ？

星符【ドラゴンメテオ】

「——え!？」

煌めく声が響く。

瞬きするぐらいの時間はあったか。上を向こうとした早苗の笑顔は突然消えた——物理的に。

落ちてきた虹光の柱によって。

十字架をも消し潰した、その柱の根本を見ると魔理沙の姿が見える。

龍のように食らいつく流星を放つ、それが今使ったアイツのスペルだ。空からマスタースパークを下に放つただけのシンプルな技だけど、当たってしまったえば衝撃を逃げさせられない分ダメージが大きい。そして、他のことに集中してるやつに当てるなんて簡単すぎる、っていうのはあいつの言で今まさに起こっていることでもある。

そんなことを考えているうちに、虹光は収まった。光の粒子がまだ漂うなか、魔理沙も降りてきた。

「うまくいったな」

「ええ、なんとかね」

パシツと手を合わせ、成功のため息をついた。まったく、相手に秘密を隠すのも楽じゃないわ。

作戦は簡単だ。私が早苗の注意を引き、魔理沙が不意をつく。

ただの陽動である。

魔理沙の方ばかり目立って私の存在と同等に捉えられたら危な



かったので、ちよつとばかり反則っぽいこともした。でも、ルールのには白よりのグレー、のはず。なにはともあれ、結果よければすべてよし、だ。

少しして、早苗がもう一度上がってきた。

「もー、容赦無さすぎですって、お二人とも……」

頭を押さえて涙混じりに言ってくるあたり、元気そう？でよかったわ。上がってきたときに少しばかりふらふらしていたのはご愛敬。というか、私は関係ないし、そもそも私の前に立ちふさがるから悪いのよ。

「さて、私達が勝ったわけだしキリキリとはいてもらおうか」

「ええ、もってるモノ（情報）ここで全部出しなさい」

「完全にヤのつく自由業の方の言い分ですよ!？」

うるさいわね、私はさっさとこの異変を終わらせたいの。あんたのせいで余計に時間が食われてるんだから、それくらいの情報提供はしなさいよ。

「うう、分かりました。敗残の将は素直に従うのみですよ……」

で、結局霊夢さんたちは何を聞きたいのですか？

「まずは黒幕。異変の首謀者のこと知ってるんでしょ？」

「ふふふ、そうですか。それが聞きたいのですね？」

いいでしょう、ならば知らざあ言って聞かせや——」

「真面目にやって」

「あ、はい」

早苗の目の奥を刺すように見て言ってみると、途端に大人しくなつた。

私、コロサレル……？なんて自問自答を繰り返してる緑髪かたを揺すって、現実に戻し話を続けさせる。

「え、ええとそうは言っても私もほとんど知りませんよっ」

「予想はついてるんでしょ。さっきの弾幕ごっここのなかでぶつぶつ呟いてたじゃない」

「え、まあはい。でも、あくまで予想で神様がたに迷惑もかけたくないですし……」

「なら、言えるところだけでいいぜ。無理強いはしないさ」

「まあ、喋ってもらってる側だから高望みはしないわ」

途端にポカンとした顔になる早苗。なによ、別にあんたの情報なんか無くても異変は解決だから聞いても聞かなくてもおんなじつてだけよ。

私だってそれぐらいは普通に言えるし。

意外そうな顔が少し気にくわなかったけど、早苗は直ぐに再起動した。

ちなみに横にいるやつはにやにやし出したので脇腹に肘を入れてやった。

「さ、話を続けましょ?」

「え。あはい」

「こんの暴力巫女め……」

早苗の顔は若干ひきつっていた。

「ええと、じゃあ本当に確定しているところだけ……」

今回の首謀者はうちの神様たちも恐れさせる存在で、しかもそれだけで……面倒だ、と思われています」

「……それって結構重要な情報じゃないの?」

そりゃ、こつちとしてはいい情報が入った方が嬉しいけどさ。あんまり羽振りがよくても逆に気味が悪くなるのよね。

そんな私の不審そうな目に気付き、早苗は困ったように笑う。

「私は解決してもらえるならその方がいいんですよ」

「へ?」

「私が動いたのは神様たちの不安を消すためです。私じゃ、解決に乗り出したら悪化しそうですし」

「異変の首謀者のことを考えたら、か」

「ザツツライト! まさにその通りです、魔理沙さん」

びしいとかつこつけて指をさし、目をキラキラと輝かす早苗。

「うちの神様の眷族である私が、簡単にいっちゃえば部下の部下である私みたいなのがその上司に歯向かつちゃえば、神様たちの心証が悪くなつちやいますから」

そうして早苗は、あははと力なく眉を垂らした。

しかし、そんな表情もくるりと代わり、今度は一転しておどけたように笑って

「えっへへ、でもその点霊夢さんたちなら私が心配する必要は有りませんもの。少しぐらいなら、迷惑を押し付けても許されますよね？」

と言う。しかし、その拳は下の方で不安を表すかのように強く握られていた。

多分、というか十中八九強がりでしょう。でも、

「そうねえ、誰かさんの頭に拳骨を叩き落とせばそんな気にもなるかもね〜」

笑って、拳を振りかざす真似までしてやった。

目を見開く早苗に、冗談よ冗談、と開いた手をヒラヒラと振る。

私は早苗の変化に気づかない振りをした。だって、アイツの事情なんて知ったこっちゃないもん。無慈悲とか言われたところで、だからなに？ 私は自分の都合で異変を解決するんだもの、他のやつの都合なんてどうでもいいわ。

因みに魔理沙は後ろで黙っていた。私の行動にあきれたんでしようね、品行方正なお友だちで嬉しいわ。

魔理沙が貝になったのを良いことに私は早苗に次の質問をする。

「で、あんたが予想したその首謀者ってのは？」

ヒントでもいいわよ」

出会ったら分かるから、別にあってもなくても困らないモノではある。けど、持つとけば便利で早く終わらせるための重要な鍵にもなるはず。簡単には喋ってくれないと思うから、一回で終わらせるけどね。

しかし、そこそこ意外な質問だったのか分からないが早苗は暫し固まっていた。

「おーい、早苗？」

「え、ひゃい!？」

お、再起動したわね。目の前まで寄って、ほっぺを軽く叩くとうまく目に焦点が戻った。

「で、どうなのよ?」

「はい、でもそのままだとあんまりよくないので……ヒントでもいいんですけどよね?」

「ええ」

「じゃあ……道敷大神って知ってますか?」

「え、うん」

「では、黄泉津大神は?」

「? 知ってるけど、それって——」

私が思い出した知識でおかしなところを指摘しようとしたら、早苗はピツと人差し指で私の唇を塞いだ。パチンと目を瞑ると、イタズラっぽく微笑むとそのまま話を続けた。

私がどう思ったかって? ……ちよつとぐらいはドキツとしたわよ。だって、同性でもそれは反則だと思わない?

「答えなくても結構ですよ霊夢さん、次が本当のヒントです」

未だに口を閉ざしていた指をどかし、睨む。

「本当のヒントって何よ。今のは無駄な問答だったってわけ?」

「いえ違います、事前知識の確認ですよ」

「事前知識?」

私の眼圧におろおろと取り乱した早苗はまったくいつも通りだった。

「ええ、それがなければヒントを出しても分からないですよ?」

本当のヒントは

——『その名で呼ばれないとどうなりますか?』

「名前で呼ばなきゃどうなる……?」

全く意味が分からないわ。そんな名前で呼ばなきゃなんて……。

ええと、黄泉津大神、道敷大神で呼ばない。呼ばないなら、呼ばないなら——そうやって呼ぶその前?

……ん、前?

いや、そんなはずがない、そんなのあり得ない!

だって、待って、どういうことよ、神話じゃあソイツは、そんな状態じゃないはずなのに!

もう、手遅れのはずなのにつ!!

急変した私の顔色で悟ったんだろう、早苗はフツとわらうと……

「今の私、ライバルを手助けする憎めないやつみたいなポジションで超かっこよくなかったですか!？」

「この残念巫女っ!!」

「あじゃぱっ」

私が投げたマイクロ陰陽玉は見事な曲線を描き、そのままヤツのおでこに直撃した。点数をつけたいぐらいには見事なフォームだったはず。

ふいくと息をついていると、早苗が赤くなつたおでこを隠し、刺すような目で見てきていた。

「あ、あんまりじゃないですか、霊夢さん!!」

「いや、今のは誰も責めないと思うわ」

真面目な雰囲気完璧に壊してくれちゃって……。おかげで話を続ける気が鳥みたいにとっか行っちゃったわ。

しかし、ソコで諦めないのが早苗クオリティ。

「さすが霊夢さんですよ、人にできないようなことを平然とやつてのけるんですもん。」

そこに痺れる憧れるう!」

「もう一発いっとく?」

ちやっと、指にはさんで見れば、すぐさま黙る早苗かな。

すちやっとあげた両手と、今にも零れそうな涙、ブンブン揺れる髪の毛は降参の証。へえ、小鈴庵の本にあった、パブロフの犬つてのはこう言うことなのね♪

しかし、私の天下はそうそう続かない。

コホンッ

魔理沙の咳が響き渡る。

「で? 満足したか」

『はい、それはもう!!』

いつの間にか、私たちは敬礼していた。いやだって、怖い……もとい、あいつの威圧が半端じゃないんだもん! 例えたとしたら、六ボス

並の威圧だったわよ。

「と、とにかく！」

ヒントはもういいましたから、早くどこかへ行ってください！ 怖いので!!」

いまだに水を湛えた瞳で、本音をさらけ出す彼女はきつと生存に必死だった。まったく、みつともないつたらありやしない——

「そ、こそそうね。」

はややくいききましょう、魔理沙」

「冷静なフリして声が震えてるのって相当シユールなんだってことが、今ようやく分かったぜ」

私もだった。

「まあ、いつか。ここから離れるのには賛成だし。」

朝いった通り、目星は大体ついてるから迷うことは無いだろうし」くるくると八卦炉をもてあそび、視線を人里の方に。ここまで来たら、私だつて分かる。結構な量が、『統制されて』集まっているのだ。異常性が高いところがあるなら、その近くにいることは、もはや決まっているかのように当たり前だ。

私は逃げるようにして、その場から飛び去るのだった。

「あ、ちよ、霊夢!? 置いてくなよ!!」

えーと、早苗またな！」

後ろからハイスピードで追いかけてくる味方(てき)に追い付かれないように。

「そういえば、この異変の首謀者。私の知り合いかも、って言うの忘れてました……まあ、別にそれぐらいならどうとでもなりますよね」

緑の巫女はここにいない巫女の少女を想うが、風と共にそれは吹き散らされた。だって『彼女』を心配するのは間違っているのだから。

「おい、霊夢」

後ろから聞こえる声に、速度を緩めず返事をする。

「なによ」

「お前、さつき早苗と話してたときに」

「後でもいいでしょ、そんなの」

思わず止まってしまい、魔理沙の方を向く。話を遮って悪いとは思うけど、でもそれはあまりに緊張感が無い話題だ。今、話すべきことではない。

しかし、私の厳しい目を真っ向から見返し、魔理沙は気にせず気軽に告げた。

「早苗の強がり、わざと無視したろ？」

「はあ、何かと思えばそんなの——」

「当たり前じゃないの。私は相手から気持ちを受け取るのも押し付けるのもしたくないのよ、めんどろうだもの」

魔理沙の質問にすらすらと答える。今の空のように、私の顔には何も映ってなかっただろう。

すると、魔理沙は、はあとためいきをついた。

「どうせ、早苗の不安を消すためにやったんだ」

「は、はあ!?!にやにやにやってんのよ!?!」

「お前がなにいつてんだよ? ったく、今さら隠したってしようがないんだよ。早苗だつて気づいてるしな」

「……ふん、なーんだ」

誰もいない空を見上げ、私は再び前に進み始めた。

ごまかしたって仕方ないなら先に言いなさいよね、まったく。要らない恥をかいたじゃない。

太陽の光が暑くてうっとうしいけど、私は後ろを振り返らなかつた。

「まったく、不器用なやつだぜ」

後ろから無遠慮な友人が一人。

「ほっときなさいよ」

返す言葉にも離れていかない、奇妙な友が一人。

残念なことに私は独りになることも、しばらくは後ろを振り返ること

ともしできないようだ。



この素晴らしき（性格の）ミコにぶちギレを！

そう今は何かに願うよりも、何かを求めるよりも私にありったけの祈りを。

誰に頼ることも出来ずに風を切つて前しか見れず進む。

しかし、心の奥に押し込んだはずのそれが、また私を包んでいく。しまい込んでいたはずの過去の幻影が悲しそうに私を見つめていた。

「それで」

吹きすさぶ風の中、ポツリと言葉を落とす。

「ここが、問題児の住処でいいわけ？」

言葉を追うように目を向けた先、そこは確かに森の一角のはずだった。前にこの辺りを飛んだ時はこんな風になつていなかったはず。

「ああ、見間違えようがないだろう？」

指を突きつけたそこは、森が四角に切り取られ見たことの無い神社が現れていた。まるで、最初からそこにあつたように。

確かに見間違えるはずが無い……ここまで不自然なものを逆にどうやってそうじゃないと言えるものか。

でも、と風に言葉を遊ばせ、くるりとお払い棒をそれに向ける。

「それにしたつて、不用心過ぎない？」

異変の真つ最中だと言うのに、そこには誰もいなかった。お出迎えの塩ぐらい投げられると思つてただけど、どこるか挨拶の動きさえない。

「はっはー、無用心なのかもしれないぜ？」

「無用な用心って意味で使つてるなら間違つてるわよ」

軽口を叩きつつ、件の神社の周りをぐるぐると回るが特に何も無い。うーん、突っ込んだ方が早いのかしらね？

元のところに戻つて、一周まわった革新的な案で妥協しようとしていると、隣からそんな必要は無いと言われた。

「霊夢、悩むことなんてないさ」

「魔理沙、何かいい案が思いついたのね!？」

「いい案も何も、私たちって言ったらいっつもこれだろ」

「え?」

ただし、口では言っていない。

魔理沙が構えたのは確かにいつも通りの八卦炉でそこから吹き出すのもいつも通りだった。

すなわち、虹色の奔流が神社に向かって一直線に突き進んで……つて、ふざけんな!! 打ち所悪くて話聞けなかったら、異変解決が面倒でしょうが。

そんなんだから外道だと言われるんだ、なんて心の囁きを無視して魔理沙に掴みかかろうとする。

が、

「落ち着けよ、せっかち巫女」

私の手の中から逃げ、親指を向ける。

「あん? なにが……」

自分の瞳孔が開いたのが分かった。

そこには、当たり前前のように無傷の神社がその威容を見せていたのだ。控えめに言って、魔理沙の光砲はそこその威力を持つ。それを本体どころか、周りの土地まで被害が……。

「って、ああそういう事ね」

「お前の十八番だろ? これは」

「あんたのやつに気配も見せず耐えきれんのなんて張った覚えは無いはずよ」

結界。それが、この不可思議な現象の正体だ。確かに結界といえは私の得意分野よ。でも、ここまで見事なものなんて大結界ぐらいしか見たことがないわ。

「まったく、ちよつぴり鼻をおられるわね」

「天狗と同じぐらいだろうが、お前のは」

失礼ね、神様と同じくらいよ。軽口はさておきこれじゃあ物理的にもお手上げだ。結界を解除するまで時間をまんまと取られることに

なる。

「そんなことはないだろ。少なくともさっきのアレ、私はノックのつもりだったぜ？」

「あれで、出てくるやつがいると思ってるの？」

「音は充分だろ」

「全部過充分なのよ。しまいにや退治するわよ」

「んじや、音出すのはぜんぶ私のせいじゃないぜ」

「喜ばしいことにその言葉は期限切れよ」

「あちやー」

と、その騒ぎを聞きつけたわけでも無いだろうけど、状況は動いた。ノックの意味合いは十二分にあったみたいね……敵意の分も合わせて。

カララ、と軽めの音が私達の所まで届く。出所は下の神社から。

「やれやれ、未開の土地の野蛮人の方は戸の叩き方も知らないみたいですねえ？」

空間に波紋を残すように、その声は不思議と通った。

その姿に私達は言葉を詰まらせる。

見苦しいわけじゃない、むしろ手折られた可憐な花を想起させる。

美しすぎるわけじゃない、その辺に転がっている石に綺麗さを求めた時のように素朴である。

激情が溢れてるわけじゃない、その瞳は澄みすぎていて逆に危うい。

王の気迫がある訳でもない、生と死を人間として形に例えればこうなるだろう、という自然なもの。

だが、なぜか。

彼女には私たちを黙らせてしまう何かを持っていた。

空間を仕切ってしまうような、そんな『特別』を。

だけど。

いや、だからこそ私は次の瞬間、それを理解できなかつた。

「うわあ、いきなりあんなもの放つてくると思つたら、本当にゴリラみ

たいな……関わりたくないですね。扉閉めときましようか」  
ピシャンツ。

彼女は、出てきた扉をそのままの勢いで閉めた。  
というか。

神社の中に戻っていた。

取り残された私たちにはできることはただ一つ。

「いやいやいやおかしいでしょっ!?!」

私たちの渾身の突っ込みが効いたのか、流石にほっとくのはまずいと感じたのか。どちらだか分からないけど、とにかく扉はもう一度開いた。

「うるさいですね〜。

こつちにはあなた達と争う理由なんかないのにどうして突っかかってくるのですか?」

しぶしぶといった体で、こちらを見上げる小さな少女は言葉の割に大して不機嫌そうには見えない。だが、よく考えてみよう。

そもそも、霊夢達がここに来たのはなんのためか。

異変を止めるためである。

では、異変を止めるにはどうしたら良いか?

「あんたにや無くてもこつちにはあんのよ!」

そこそこ面倒なことになってるから早くやめてほしい……って言ったところであんたやめないでしょ?」

つまりは、目の前のこいつをぶっ飛ばせばいいってだけ。

例え、こいつじゃなかったとしても目立つやつを片っ端から叩きのめしていけばいつかは辿り着くし、なにより私の勘がこいつを指している。

「だから、さっさと私にぶちのめされて異変をやめるか、それともボコ

ボコにされてから情報を譲渡するか選びなさい？」

「言葉のセレクトが物騒すぎるだろ。あと、私の発言をパクるなよな」  
金髪は無視して、目下の相手に指を突きつけた。でも、やつはそれさえも気だるげに受け流して言い募る。

「だから、ゴリラって言ったのです。言葉が通じないのも当たり前前田のクラッカーですね」

「何よ、シンプルでしょーが」

「むしろ、脳の回路がシングルな気がします。もうちよつと線を増やしてくださいよ」

「で、結局あんたは何が言いたいの？ 馬鹿にしたいだけなら即刻処断してくれるわ。こつちだつてあんたみたいなのんびりしてる訳にはいかないのよ」

ずるずると引き伸ばすように言を重ねる少女を睨む。

そんな私の目にやれやれと肩をそびやかし（微妙にサマになってるのが、こつちが悪いみたいな雰囲気を出しててやたらイラツとくる）、ぴつと指を立ててきた。

「ばーか」

「よし、こいつはぶちのめすわ。異変関係なく、できるだけ惨たらしく」

「落ち着け、霊夢！ お前は馬鹿にされてるんだ！」

「知ってるわよっ」

ふうー……ふうー……！！

魔理沙の声に従って漏れでる呼気を鎮める。

ふうー……ひーひーふうー……。

と、そんな様子を黙って見ていた彼女が今度は魔理沙の方を向く。思わず、その動作に注目した私たちは本当に失敗から学べない人類である。

彼女はそのまま白黒の方に指を突きつけて……

「なんだか全体的に2番手臭がします。

そつちの人がいないと、認識されなかった、みたいな」

「……………ひぐつ、えぐつ、そうなのか？」

「なんてことを言うのよ!？」

魔理沙に多大なるダメージが突き刺さった。あの子、なんてメタいことを言うの的確に魔理沙の心を抉るなんて……………恐ろしい子!

確かに人里じゃあ、そんな噂を聞いたり聞かなかつたり……………。

「な、なあ、霊夢……………私はお前がいなけりや認識されてなかったのか？」

そうなのか? うう……………ふえ」

「そんなことあるわけないじゃない! 魔理沙はいつも周りを元気にしてくれるわ! むしろ、太陽! 魔理沙はみんなの太陽よ!」

「ほんと、本当に……………?」

「どつちかって言うとう月じゃないですか? あの他の恒星がないと認識されない……………」

「ひぐぐ、ひぐつ、どうせ私なんて……………」

「あんたは黙っててっ!!」

ああもう、魔理沙そんなことないから、ほら涙拭きなさい。

あなたは間違いなく皆が認める主人公よ?」

魔理沙が泣き止むまで10分ぐらいかかった。その間も奴はこちらに挟り込むような弾丸を放ってきて……………。今まで見てきた中でいちばん嫌いかもしれないわ、あの子!

「泣き止みましたー?」

上空に浮かぶ仮名紅白ゴリラさんと白黒メンヘラさんに呼びかけると、物凄い視線が返ってきました。

だって、思ったこと言っただけなのになんであんなに泣くのですよ、あの人。よっぽど打たれ弱いのでしょうか?

それに、もう1人もちよつとおちやめに可愛く言ってみたら、大激怒しましたし。

この土地の住人って天狗さんも含めて変なのしか居ないのでしょ

うかね？

そうやって、首を捻っているとまたも紅白さんの方から声が飛んできました。どうでもいいですけど、紅白と白黒ってプリキュアみたいですよ。私はあれ見る機会少なかったのでよく知りませんが。

「ホントにどうでもいいこととで尺使ってんじゃないわよ！」

じゃなくて、とにかく……むしろくしゃするし、片付かないしであなたをそこに転がしてやるわ。

さっさとこの結界を解きなさい、そして、異変の情報も言いなさい」「嫌ですけど？」

「よおし、それじゃいまか……えっ」

なんだか、鳩型の怪人が豆の変身ヒーローの必殺キックくらった時みたいな顔してますけど、むしろなんでその理屈で行けると思ったのやら。

「嫌って……でも、今までの首謀者はちゃんと……」

「知りませんけども。そもそも倒されたからって情報提供しなきゃいけない理由が分かりません。」

あと、なんで上から入ってこようとしてるんですか？

普通、人の敷地に踏み入れる時は入口からでしょうに」

「えっ、あつ、その……ごめんなさい？」

だんだん弱くなっていく語尾をなびかせて、彼女らはようやく地面に降りました。恐る恐る足を進ませ、私の管理する神社の中へ。

「ようこそ、いらっしやいませ。本日はどういったご用件でお越しでしたか？」

「!? いや、その異変の解決をするために首謀者を倒そうと……」

「そのような崇高な目的からでしたか。ですが、こちらではそのご要望にお答えすることは出来ませんゆえ、お引き取り願えませんか？」

「あつはい」

静かに去っていく足音に私はゆっくりと手を振り……

「じゃないっ!!」

ぱつと振り返った2人に面倒そうな顔で応対してあげました。

「なにかありましたか、騒々しいですよ？」

「むしろ、こつちが何事かと思つたわ！」

「では、そのままお引き取りお願いします」

「無理にでも帰そうとしないで。会話をしてよ！」

「あははは、殴り込みに来た人と話し合えるわけないじゃないですか。ちなみに常人の会話技能には肉體言語は含まれないって知っていますか？」

「この子は私をなんだと思つてんのよ!？」

「もちろん、ゴリラですが。ちなみにそつちの白黒の人はメンヘラと認識しております」

「知りたくなかつた衝撃の事実！」

ゼーゼーと肩で息をして、こちらを睨みつけるお二人。私にはとんと覚えがないので、膝カツクンで親を殺された子供が仇に向けるような目でこつちを見ないで欲しいんですけど……。

素知らぬ顔が気に触つたのか、それとも急にスイッチが入つたのか分かりませんが、紅白の人の方が突然私に指を突きつけました。

「とにかくつ、私と勝負しなさい！」

私が勝つてもあんたが勝つても恨みっこ無しでもう二度と会わないわー！」

「いじりやすいので私から会いに行きますね」

「会わないわ！　いいから、あんたも準備しなさい」

ふむ、ゴリラに日本語は早かつたのでしょうか？

肩をそびやかして、全身から怒りのオーラを放つ彼女はまさに巨神兵を彷彿とさせます。目からビーム出そう。

なんて、ふざけていられたのもその瞬間まででした。

ヒュオン

ドスツ

銀色の線が私の頬をよぎり、背後で刺さるような音を立てました。目の前の巫女さんは丁度殺意を投げたようなポーズ。恐る恐る振り向くと、そこには明らかに人を殺せるような、そんなリアルな針が玄



関の柱に。

そんな私を追い詰めるように冷え切った言葉がするりと入り込みます。

「じゃ、始めるわ。当たりどころが悪くても恨むんじゃないわよ？」

気配を感じて、慌てて横に転がると

ドンツ！

馬鹿みたいな硬度のお払い棒が振り下ろされました。

目の前にそびえ立つ彼女は鬼神のようでもあり……何とかしないところで終わっちゃいますね、人生。

認識したとたん、私の体は逃げることを止めた。

冷たい仮面を被った彼女と鏡合わせのように、ゆらりと立ち上がり

「ふうん、ようやくスイッチが入っ……っ!？」

頭に脚撃。

足に衝撃が来るが、相手の巫女さんは両手を使って防いだ。

遅れて巻上がる土煙を置き去りに、反動も使って一旦飛びすぎる。

「中々いいの、持つてるわね。だけど体術なら私だって少しは得意よ？」

そう呟いた直後。

飛んだ先に即座に追いつかれる。そして、同じように頭に蹴りを飛ばしてきた。ただし、両足で。

「むぎむぎと食らうはずがないでしょう?」

オーバーすぎるんですよ。

そんなのは狩ってくれ、と言っているようなもの。よく言うでしょう、アクション映画の見すぎだって。

倒れ込んで、真上を通過する彼女に向け足から一気に起き上がる。背中からの打撃、しばらくは起き上がれないはず。

そんな常識的な私の予想は非常識に塗り替えられる。

「ビツクリしたわ、普通の人間なら対応出来ないで喰らうのに。

避けるどころか反撃まで入れてくるなんて、ね」

彼女は空中でそう呟きました。なんのことは無い、先に空飛ぶのを見ているのになんで予想できなかったんでしょうかね。

私の反撃を喰らう一瞬前、彼女はそのまま宙に浮き上がったので  
す。結果、私の反撃は空振り、彼女は悠々と見下ろして眩くのでした。

「おーい、霊夢ー、1人でも大丈夫そうか？」

「むしろ、1人でやらしてくれないかしら？ さっきのイライラ分消  
費してないから」

攻めを考えあぐねていたら、宙に浮き上がった彼女はそのまま高所  
へ。

「さあて、さっきは外してあげたけど……こんどはそうはいかないわ  
よ。」

こきつと首を鳴らすと、彼女は1枚のカードをその右手に出しまし  
た。なんだか、色とりどりの図柄が書かれた1枚のカードです。何故  
か体がキュツと締められるようになる感覚とともに警戒度を上げま  
した。

「踊ってくれる？」

【夢想封印・寂】

その瞬間、空に沢山の点が現れた。

最初は爆弾かと思いました。

それは多分間違いないけど、正しくはなかった。

雨のように降り注ぐ光弾を前に、私はしばしばんやりしていたので  
す。それもまた、正しくなかった。

だから、はっと気づいた時には目の前に

ドンッ！

……………!?

チカチカと瞬く視界を気合いで振り払う。

痛い……ですが、殺傷力はない。いや当たりどころが悪ければ死に  
ますか。

先の彼女の発言を思い返して、その威力の程度を知る。

私が喰らったあとも次々と降り注ぐ弾幕を何とか避け、上にいる彼女に目を合わせました。どうやら、あちらもこちらを見下ろしているようで。冷たい目はその筋の人には人気が出そうですね。

足元で弾けていく弾に無骨なステップダンスで応じて観察をすると、弾は全て彼女から吐き出されていました。彼女の全身から全方位に向かつて、ネズミ花火か何かみたいに。

ありがたいのは全部直線軌道ってところですかね？

ただ、土を激しく叩く弾音は確実に大きくなっていますね。このままじゃ飲み込まれるのも遠くない。

というか、そもそもこの雨を人の身で避けれるはずが無いじゃないですかー。

だんだん足に乳酸菌が溜まっていくのを自覚しつつも、走って跳ぶのを止められない。ダンスの弾音は未だに響き続けているから。無尽蔵に吐き出されるそれは雨粒と同じぐらい振るくせに、威力だけ上がってしまっています。後大きさ。

だから、仕方がないですよ、負けても。だって私はただの人間なんですもの。

そうして、私は自分に降参する。

それと同時に私は足を止めました。

もちろんそんなことをすれば、無秩序にばらまかれていた弾丸が牙を突き立てるに決まっています。

その光景を眼の中央に合わせ、私はたった一言だけ呟きました。

『遮断』

その一瞬後、私は光の乱舞からそっと眼を閉じました。